





私たちの強さ、平安、幸福は主の内にある。試しと艱難のこの世にあって私たちには、主を信じ、悔い改め、主の大義のために働くことによってもたらされる、穏やかで落ち着きのある確信が必要である。もし私たちが神を認め、感謝し、仕え、また神の子供たちを愛し、真のクリスチャンとしての責任を受け入れるならば、たとえ困難やわずらいがあろうとも喜びを得るであろう。

使徒ヨハネは次のように述べている。「もしこれらのことがわかっている、それを行うなら、あなたがたはさいわいである。」(ヨハネ13:17)

財産のなかに永続する喜びはない。また高慢の中には、現世であれ来世であれ平安はない。慰めと理解は、道徳の御旗をかざして歩まれた世にあってあらかじめ定められていた十字架上で勇氣ある、慈悲ある、愛ある行ないを示された御方の腕の中だけにあるのである。

私たちは、自分を不幸に陥れた他人の過ちを赦すことはできない。また自らの過ちのために自分自身を見捨てることもできない。イエスは私たちの罪のために死なれた。イエスは私たちの救い主、贖い主であられる。

主は古代のイスラエルの民に言われた。「……もしあなたがたが、まことにわたしの声に従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。」(出エジプト19:5)

私は神が生きておられ、イエスがキリストであることを知っている。すべての人が、このことを知ることによってもたらされる喜びを享受できるよう、イエス・キリストの御名によって祈るものである。アーメン。

マリオン・D・ハンクス長老
十二使徒評議員会補助

も く じ

悪を言うな…… 434 ……N・エルドン・タナー
たかが教師じゃないか…… 436 ……トーマス・S・モンソン
祈りによって子供を教える…… 439 ……マリアン・P・ソレンセン
ホーム・ティーチャーの責任…… 442 ……マリオン・G・ロムニー
異国人…… 447 ……ジェーン・ルーティス・ハウザー
姉妹、什分の一を納めていましたか…… 449 ……エリザベス・ストーカー
新しい教会本部ビル…… 450
小さなお友だちへ…… 453 ……ビクター・L・ブラウン
おもちゃばこ…… 454
かみにんぎょう…… 455 ……ジュディ・ケイプナー
サムエル…… 456
ジョージのえがお…… 458 ……シェリー・ジョンソン
シオンの幸せ、われらも受けん…… 461 ……ロイ・W・ドクシー
シオンのステーク部を堅くせよ…… 465 ……ハロルド・B・リー
食うと食わざるとは汝に任す…… 470 ……N・エルドン・タナー
人——神の子…… 474 ……マリオン・G・ロムニー
教会幹部の話…… 477 ……ハロルド・B・リー
ローカルニュース…… 478

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

ハロルド・B・リー
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ (内務伝達部長)
ジョン・E・カー (配送・翻訳部長)
ドイル・L・グリーン (教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ (教育資料担当主幹)

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプラー
リグラント・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

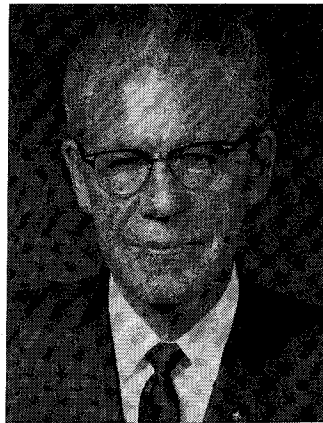
ローカル編集

高木まりゑ

聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

悪を 言うな



第一副管長 N・エルドン・タナー

主イエス・キリストの述べられた幾つかの言葉を引用しよう。どれもこの話の題に深い関係がある。「自分を愛するようにならぬ隣人を愛せよ。」(マタイ22:39)

「汝ら隣人の悪口を言いましたこれに害を与うることなかれ。」(教義と聖約42:27)

「……審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。あなたは、自分の言葉によって正しいとされ、また自分の言葉によって罪ありとされるからである。」(マタイ12:36, 37)

もうひとつの言葉は、黄金律として知られているものである。「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」(マタイ7:12)

そして主は言われた、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

私たちは皆、隣人の噂をしたがる傾向が大きいようである。実のところ、それは人情である。どういうわけか人の長所よりも短所を語る方がずっと容易らしい。単なる噂にしても事実にしても、私たちは自分が聞いた隣人を傷つける言葉を繰り返す、それは雑草のように尾ひれがついて広まってしまう。だからこのことについて、主の御言葉に留意することが最も大切である。

もし良き隣人になりたいなら、私たちは真理と事実を捜し

求め、次の戒めを破ることのないように言葉を慎むべきである。「あなたは隣人について、偽証してはならない。」(出エジプト20:16)

次の話は反省を促してくれる。隠居して早朝の庭の手入れを日課にしているある老人が、毎朝決まって通りの向かい側の家に牛乳配達人が立ち寄り始めたのに気づいた。配達人は夫が仕事に出かけた直後に着いて30分ほどいた。チャーミングなその家の妻は初等協会の教師で聖餐会にはほとんど欠かさず出席していた。

このような日が数週間続いて、老人は彼女の及ぼす影響や教えている子供たちのことが心配だと、隣人にそのことを注意し始めた。そしてその状態を監督に報告すべきだと思ったときには、話はワード部に広まっていた。

監督は事態に驚き、牛乳販売店の店主を訪ねてその配達人の名前を聞き、どんな人かを聞き出した。店主は配達人に会って言葉巧みに言った。「あなたはリンカーン通りに新しいお客を持ちましたね。どんなてくだを使いましたか。」

「てくだですって。」牛乳配達人は言った、「あれは私の娘です。毎朝私に朝食を作ってくれて、毎週金曜の夜は私の妻とふたりで娘の子供たちを見ているんですよ。それがどうかしたんですか。」

この話は、主の勧告に従うことの大切さを教えている。主はこう言われた。「あなたは偽りのうわさを言いふらしてはならない。あなたは悪人と手を携えて、悪意のある証人になってはならない。」(出エジプト23:1)

この言葉を心に留めようではないか。

「人の過ちを 責めたきときは
先ず心に聞け おのれは如何に
交わりを絶つな むしろ求めよ
怒りし言葉は おのれに戻らん

軽んずるなかれ 兄弟の名を
おのが名のごとく 宝とまもれ
ただ思い込むな 誤りもあらん
つれなく見えても よき友もあり」

(讚美歌151番)

私たちは人の中に自分の見ようとするものを常に見いだすようである。だれでも知っている通り、私たちは皆不完全である。欠点や弱点を指摘すると欠点に心が奪われ、その人の長所が目につかなかったり見過ごしにされたりして、結局だれの益にもならない。このことは次の話によく説明されている。

「デラウェア川を渡るワシントン」という非常に有名な絵がある。この絵そのものや複製を見た多くの人が、指導者ワシントン將軍のたくましく力にあふれる姿に感嘆する。画家はワシントンの舟に乗っている男たちの表情に、決意と勇気を巧みに描き出している。

しかしある批評家はこう指摘している。武装して銃を持った大の男が12人も乗れば、このように小さな舟は水に浮かんでいられなかっただろう。沈まないとしても、立っている3人の男のために舟は転覆しただろう。あの軍人が握っている13の星のある旗は、1776年のデラウェア川横断のときにはなかった。川の背景はデラウェア川のそれと全く違ってむしろ絵を製作したドイツのライン川のものだ。

不完全な点に心を向けると、言わんとする本当のことを理解するのが難しい。この批評家は短所ばかりを見ている。それは人についても同じである。性格や個性や姿かたちの短所弱点をひとたび指摘すると、その人の長所をはっきり見つめるのは難しい。

私たちはこう自問するがよい。「人に自分の弱点を指摘されたり、自分が他の人について言っているようなことを自分について言われたらどうだろうか」と。良い性質を捜し、その人に対してだけでなく彼を知っている人々に対しても賛辞を語るほうが、どれほど良いであろうか。

少し前、息子との間に親しさや交わりがなくなろうとしていると言って私の所へ来られた父親があった。彼は、自分は息子を愛しているし息子も普通は良い子なのだが「時々、いらいらさせられる」と言って、私の助言を求めた。

私は、子供に父から愛されていると感じさせ、毎日何か良いことを捜してほめたり勇気づけたりしてはどうかと勧め、そうすれば必ずもっと良い少年になるはずだと助言した。それから2、3ヵ月して、その父親は状態が大きく変わって自分も息子も進歩し、今までになかった新しいつながりをふた

りとも喜んでいと伝えてきた。

子供は自分に期待されているように行動する。おまえはまぬけだといつも言われているなら、その子はそう信じ込んでやがて進歩しようとする努力をあきらめてしまうかもしれない。彼はこう考えるだろう。「そうか、みんながぼくをそんな風にしか見ないなら、かまうものか。」良くない行ないや失敗を責められてられる人は、そういう評判があるならその通りやってやれと思うかもしれない。

子供も妻も友も仲間も、自分が言われている通りに良くも悪くも行動しがちである。心のこもった正直なほめ言葉は良い性格を築き、批判は性格を崩す。人の評判や性格を落としても決して自分の性格や評判が良くなりほしくない。達成したことや性格をほめれば、相手ばかりか自分も高められる。

次に有益な提案を幾つかあげてみよう。

1. 週に最低1回、ほかの人が何か達成したことについて賞賛の手紙を書こうと決心する。

2. 1日に最低1回、直接会うか電話でだれかをほめる。これを目標にして1週間行なえば、このようなことを続けていきたいと思うようになるに違いない。

3. 1ヵ月間、批判しなくなっても我慢した回数を自分だけわかるように書きとめておく。心から人をほめるときに回数がどれだけ減るかを見てください。

4. 夫や妻である人たちは、週に最低1度、お互いや子供のさらに伸ばしてほしいと思う良い性格をほめる。子供が良くない点を改善できるように導く上手な方法を考えなさい。喜ばしい成果が得られるであろう。

もしあなたが監督やステーク部長やその他の役員を弱体だと思えば、人にその弱点を指摘するのではなく彼を支持し、支えることによって、彼は強くなるであろう。そのときこそあなたの援助が必要なのである。私たちは隣人の性格を伸ばすことで主に仕えるのである。「彼らのいと小さき者に捧ぐるとも皆われに捧ぐればなり。」(教義と聖約42:38)

「悪を言うな人に 善きことを語れ
聞きしことみなを 語るはいやしき
愛をもてえらび よき種を蒔きて
わずかの善きこと つとめて語らん」

(讚美歌37番)

たかが

教師じゃないか

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

しばしば私たちは「時代が変わった」という言葉を聞く。おそらくその通りであろう。現代はちょっとあげただけでも、医学、運輸、通信、探検の分野で非常な進歩が見受けられる。しかし、その変化の多い中にも全く変わらないものもある。たとえば、少年は依然として少年であり、同じように少年らしい誇りを持ち続けているのである。

ある時、私はよく言われる会話を立ち聞きした。

3人の小さな子供たちが自分たちの

父親の良い点を話し合っていたのである。ひとりが言った。

「僕のお父さんは君のお父さんより大きいよ。」すると、もうひとりが「だけど僕のお父さんは君のお父さんより頭がいいよ」と答えた。そこで3人目の少年が言い返した。「僕のお父さんは医者さ。」それからひとりの少年の方を向いてばかにしたように言った。

「君のお父さんはたかが教師じゃないか。」

母親の呼ぶ声でその会話は終りになった。しかしその言葉は私の耳の中でこだまし続けた。たかが教師じゃないか。たかが教師じゃないか。たかが教師じゃないか。いつか、その幼い子供たちは靈感あふれる教師の本当の価値を認めるようになり、このような教師が彼らの人生に残す忘れ難い印象を心から感謝するであろう。

ヘンリー・ブルック・アダムスが述べているように、「教師の与える影響は消えることがない。そしてその影響はとどまる所を知らない。」これは私たちの教師、すなわち家庭での教師、第2に学校の教師、第3に教会の教師すべてにあてはまる真理である。

最もよく私たちの印象に残っている教師は、私たちに最も大きな影響を与えた教師であろう。その教師は黒板を使わなかったかも知れないし、学位を持っていなかったかも知れない。だがその教えはいつまでも絶えることなく心からの関心に基くものであった。然り、それは母親である。同時に、それはまた父親でもある。事実、すべての親は教師なのである。



神

からこのような教師に授けられた生徒、すなわち私たちの家庭に来る赤ん坊は、神御自身の家庭から地上に新たに降りてきた人類のかわいらしく新しい花である。

最初の教育の時間は、一瞬の間である。機会は失いやすいのである。教師としての責任をなかなか果たさない親は、しばしば言われる「教えていたら」という言葉を苦々しく経験するであろう。

神より与えられた教育のつとめを始めるにあたり、親は一層の靈感を必要とするのである。世にあって最もすばらしい諸々の感情は、広大な宇宙あるいは小説や本の中から引き出されるものではなく、子供の寝顔を見つめる親の表情の中にこそ見られる。「神のかたちに創造し」という聖書の一節は、親がこの経験を繰り返すたびに、新しくかつ生き生きとした意味を持つのである。家庭は天国といわれる安息の場所となり、愛ある両親はその子供たちに「祈ること、主の前に正しく歩むこと」とを教えるのである。(教義と聖約68:28) このように靈感された親には決して「たかが教師じゃないか」という言葉は当てはまらないのである。

次に、学校の教師について考えよう。家庭教育の一部を学校の授業にまかせるときが必ずやってくる。ジョニーとナンシーは、毎日家から学校へ通う楽しそうな子供たちの中に加わる。そこには新しい世界がある。そして子供たちは教師に会う。

教師たちは生徒に将来の希望を抱かせるだけでなく、将来への心構えと彼

ら自身とに影響を及ぼしているのである。もし教師が未熟であれば、子供の人生に傷を残し、自尊心を非常に傷つけ、他人に対する見方をゆがめるのである。しかし、もし教師が生徒を愛し、その期待を裏切らなければ、子供たちの自信は増し、才能は伸び、将来は保証されるであろう。

よい生活への橋渡しをすることよりも、信仰を失わせることの方を好む教師がいることは不幸なことである。私たちの導く力は誤り導く力になり、誤り導く力は破壊の力になるということをお忘れてはならない。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように言われた。「根本的な真理を疑う者、あるいはその信仰を破壊する者は、傷つき、不具者のようになり、また無力になってしまうのである。神はそのような者を厳しく責めたもう。ほかの人が日の栄光に進むのを、故意にささげざる者、この人の落ちる深みは、その深さをだれが測れようか。」(「不死不滅と永遠の生命」, 第2巻, P. 143, 144)

私

たちはクラスを管理できないときでも、少なくとも生徒を備えさせることはできるのである。皆さんは「どうして」と問うであろう。「神の日の栄の王国への指導を与え、神の真理と人間の理論を区別するバロメーターを与えなさい。」

私は数年前そのような指導書を手にした。それは私たちが普通合本と呼んでいる、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠を一冊にした聖典であった。その本は愛する父親からよく忠告に従

った美しい娘への贈り物であった。その父親は見返しにこのようにすばらしい言葉を書いた。

「1944年4月9日

マウリンへ

あなたは真理と人の哲学の誤りを見分ける方法をいつももち、知識を増して霊的に成長していますね。私はあなたにこの聖典を贈りますので、折あるごとに読み、生涯大切にしてください。

愛をこめて。あなたの父親である

ハロルド・B・リーより」

「たかが教師」と言えるだろうか。

最

後に、私たちがいつも日曜日に接する教会の教師について考えよう。このような場で、過去の歴史、現在の望み、未来の約束がすべて教えられる。特にここでは、教師はパライ人になりやすく、弟子になるのは難しいことを知るであろう。生徒は教師が何をどのように教えるかでなく、どのように生きているのかを見るのである。

使徒パウロはローマ人へ勧告した。

「なぜ、人を教えて自分を教えないのか。盗むなど人に説いて、自らは盗むのか。姦淫するなど言いつつ、自らは姦淫するのか。」(ローマ2:21, 22)

パウロは靈感に満ちた、力強い教師であり、私たちのよい模範である。捕われていた暗い獄でのパウロの行ないから、成功の秘訣がうかがわれる。パウロは兵卒の足音と彼がつながれていた鎖の音を知った。パウロに好意を寄せていたと思われる獄の番人は、皇帝の前に行く方法に関して何か聞きたいことがあるかどうか彼に尋ねた。する

とパウロは自分に導き手、すなわち聖霊がいると語ったのである。

この同じ聖霊はパウロがアレオパゴスの評議所に立ったときも彼を導いた。それは次のように述べられている。

「あなたがたが知らずに拝んでいるものを、いま知らせあげよう。この世界と、その中にある万物とを造った神は、……手で造った宮などにはお住みにならない。……神は、すべての人々に命と息と万物とを与え、……われわれは神のうちに生き、動き、存在している……。……われわれも、確かにその子孫である。」(使徒17:23-25,28)

もう一度尋ねよう。「たかが教師か。」

家庭にあって、学校や神の宮にあって、すべての人々の人生に影響を及ぼしている一人の教師がいる。その教師は生と死、人のなすべき義務と行く末について教えた。またその人は仕えられるためでなく、仕えるために、受けるためでなく、与えるために、自分の命を救うためでなく、ほかの人のため命を捧げるために生きたのである。その教師は色欲よりももっと美しい愛について、また宝よりも貧しさについて述べた。この教師は律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えたと言われている。今日の世では、多くの人々が富と名誉を求め、「現われれば消えてゆく」哲学により支配されているが、この教師は決して、風が吹けば永久に消えてしまうような砂の上にはものを書かなかったことを覚えておこう。その律法は石の上に刻まれたのではなく、人の心に刻まれたのであった。私が話しているこの教師とは、

全人類の救い主であり贖い主である、神の御子イエス・キリストである。

献

身的な教師は「われに就きて学べ」という主の招きに応じて学ぶのである。また彼らは主の聖なる力を授かるのである。私は幼い頃このような教師に教えられたことがある。私たちは日曜学校のクラスで教師から、地球の創造とアダムの墮落、イエスの贖いの犠牲について学んだ。彼女はモーセやヨシュア、ペテロ、トマス、パウロ、イエス・キリストを主賓としてクラスに迎えた。私たちはその人々に会わなかったが彼らを愛し、敬うことを学び、また彼らのようになろうと思ったものである。

ある日曜日の朝、彼女は級友の母親の死を悲しげに発表した。そのときほど感動的で、いつまでも忘れられない教えとして残ったことはなかった。

私たちはその朝、ビリーのいないのに気づいたが、休んだ理由は知らなかった。その日のレッスンは、「受けるよりは与える方が、さいわいである。」(使徒20:35)というテーマであった。レッスンの最中に、彼女は本を閉じ、神の栄光に私たちの目と耳と心を開かせた。彼女は「私たちのクラスのパーティー資金はいくらありましたか」と尋ねた。

クラスの雰囲気沈んでいたので、かえって「4ドル75セントです」という返事が元気よく聞こえた。

彼女は静かに提案した。「ビリーの家族は悲しみに暮れています。けさ家族の人々を訪問して、皆さんの資金を差し上げたらどうでしょうか。」

私

私たちは3丁ほど歩いてビリーの家に行き、彼と兄弟たちとビリーの父親とにあいさつしたのを覚えている。特に、彼の母親がいなかったのが心に残っている。また私は、大切なパーティーの資金を入れた白い封筒が教師の手から悲しみに沈んだ父親の手に渡されたときの皆の目に光った涙が忘れられない。私たちは教会堂にかけもどった。かつてないほどに私たちの心は軽くなり、喜びに満ち、理解が深まった。神より靈感を受けた教師は少年少女に神の永遠の真理について教えたのである。「受けるよりは与える方が、さいわいである。」私たちは「聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたのではないか」(ルカ24:32)という、エマオへ向かう弟子たちの言葉をそのまま自分たちの言葉として言うことができたであろう。さて、初めの対話にもどろう。「僕のお父さんは君のお父さんより大きいよ」「僕のお父さんは君のお父さんより頭がいいよ」「僕のお父さんは医者さ」というあざけりを聞いてその少年はこのように答えることができたであろう。「君のお父さんは僕のお父さんより大きいかもしれない。君のお父さんは僕のお父さんより頭がいいかもしれない。君のお父さんはパイロットや技師や医者かもしれない。だけど僕のお父さんは、僕のお父さんは教師なんだ。」

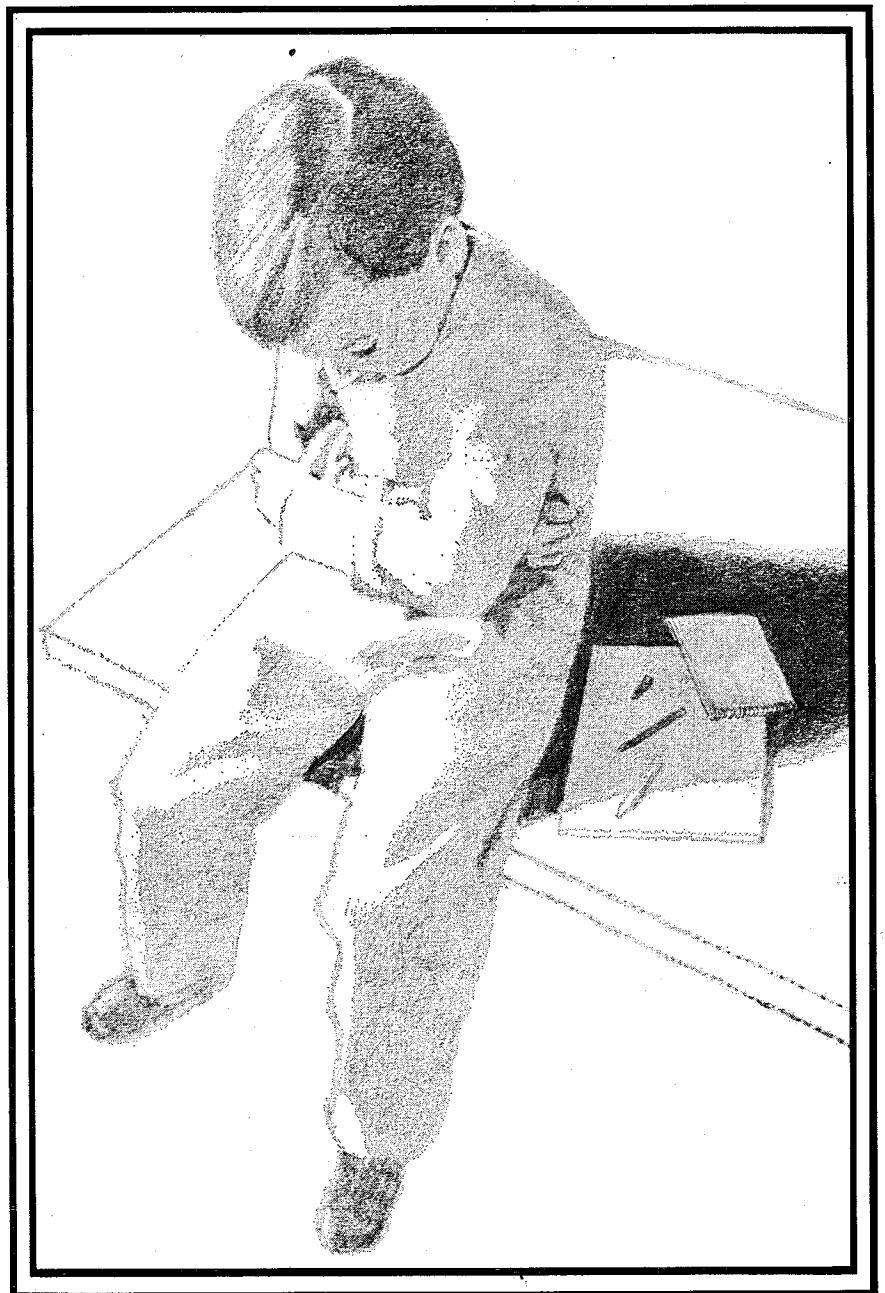
私たちひとりびとりがこのようにいつも心に忠実な価値ある心掛けを持てるよう、教師であり、神の御子である、主イエス・キリストの御名によりへり下って祈る。アーメン。

祈りによって 子供を教える

マリアン・P・ソレンセン

男の子はわずか6歳でしたが、自分の目にあふれてくる涙をきまり悪く思いました。ほかの子たちは皆運動場で遊んでいるというのに、自分はお母さんのそばにくっついているのも恥ずかしいことでした。その子の家族はこの盆地にきたばかりで、家は学校からバスに乗ってかなりの所にありました。

お母さんは最初のその日、一緒に学校へついて行ったのですが、すぐ帰らなければなりませんでした。男の子はお母さんの手にしがみついていた。お母さんは男の子をがらんとした学校の構内に連れてゆき、ひとつの教



室に入って戸をしめました。お母さんは男の子の肩に腕をまわして、「天のお父さまがきょうあなたを助けて下さるようにお祈りしましょうか」と聞きました。その子がうなずいたので、お母さんは主が息子を祝福して下さるように静かな声でお願いしました。息子が楽しい1日を過ごせるように、友だちが見つかるように、耳をすましてよく勉強できるようにと祈りました。ほんのひと言ふた言でしたが、男の子の涙は止まりました。学校を出るとき、その子はお母さんの手を離していました。

この静かなひとときは男の子に力と慰めを与えましたが、大切な教訓を学ぶ機会ともなりました。子供は、母親が自分のことを心にかけていて気持をわかってくれることを知りました。また、助けてくれる人がいないようなときに、頼ることのできる方があることも知りました。その子は幼いとき、問題が大きすぎて、自分ではどうすることもできないときに、主に頼ることの大切さを経験しました。

ソレンセン姉妹は7人の子供の母親で、ハンボールド（合衆国ネバダ州）ステーキ部扶助協会会長として働いている

子供に知ってほしいことを教える最良の手段は、祈りであると言えるでしょう。おそらく、よく考えもしないで機械的に言う方が、真剣になって祈るより簡単なために、両親はよくこのすばらしい手段を忘れます。子供のためあるいは子供に必要なことについて声を出して祈るためには、子供のことをよく知らなければなりません。それには静かな祈りや黙想が必要です。

子供たちには実際に声を出して祈る経験が必要です。子供が順番に感謝や家族全体に必要なことを表現する家族の祈りが、それにうってつけです。しかし大家族では、父親や母親が心の思いを述べて子供たちに祈りの模範を示す機会が少なくなるかもしれません。おそらくは、祈りによって子供を教える時間が充分取れるように、両親の祈りの方に重きを置くようにするとよいでしょう。

ひとつの注意として、子供はだれよりも早く嘘を見破ります。ですからただ言葉だけで祈るのではなく、みたまの促しを待って祈って下さい。いつもの場所に家族そろってひざまずき、天父に呼びかけるとき、家族の上にみたまが降りるのを感じるができます。子供は話では聞かないような

ことでも、このような祈りの中での助言や注意は聞くでしょう。それは「たくさんの祝福」に感謝するだけでなく個々の原則や祝福に対して両親が子供に証を述べる機会です。

ある家族は、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長死去のニュースを聞いてすぐあとにひざまずき祈りました。父親が、この立派な予言者の時代にいわせたことを感謝し、今までのすべての予言者と特にハロルド・B・リー大管長のことを主に感謝しました。彼は子供たちが新しい大管長のことをよく知って、その教えを学ぶように祈りました。彼は祈りました。「お父さま、このすばらしい子供たちが予言者に従う人たちに従い、リー大管長がなさらないようなことは決してしないように、どうぞ祝福して下さい。」

家族の祈りに子供たちの注意をひきつけたいときは、祈りの中で名前をあげるようにしてごらん下さい。母親は「きょうメアリーはよくお手伝いをしてくれました。お手伝いが上手になったことを感謝します」と言うことができるでしょう。その子その子に応じたことを言うのですが、必ず肯定的な表現を使って下さい。「お父さま、私たちはジョンが怒りたい気持を抑えようと

一生懸命努力しているのを知っています。ジョンが立派に成長していることを感謝いたします。そしてお父さまの助けを感謝いたします。どうぞジョンを助けてあげてください。どうぞジョンを祝福して、私たちがジョンを怒らせずに愛と親切を示して助けてあげられるように私たちも祝福して下さい。」

両親は祈りの中で、子供への正しい希望を述べます。みたまの励ましがあって、子供たちが聖典を学び、伝道や神殿結婚の準備をし、やってくる誘惑に打ち勝つ力を得たいと思うようにと主に願うのです。

子供それぞれに今何が必要なのかを知るには、子供たちの心の観察と自分ひとりの祈りが多く必要とされます。そのようにして準備した母親ならば、良くない振舞いの原因を知って、難しい時期にも忍耐をもって子供を理解してあげることができるでしょう。悩みを持つ子供をふたりきりになれる所へ連れて行き、その子に必要なことを一緒に祈り求めるならば、母親は子供に人生の目的とは何かを教えることができます。言葉ではなかなか言い表わせない気持が祈りの精神によって表現できる時、その子に母親の愛が示されます。

祈

りを始める一番簡単な方法は、感謝を述べることです。「天のお父さま、この良い娘を私たちにさずけて下さいましたことを感謝いたします。娘をよく知り、この世の生涯で娘を助けてあげられるように、どうぞ私たちに助けて下さい。私は忙しいときが多いですが、もっと喜んで娘の話を聞き、お説教や批判をせずに聞いてあげられますように。娘を心から愛していることを良い方法で伝えることができますように、また娘に必要なことを理解できますように助けて下さい。そして天のお父さま、どうか娘が齢以上の知恵を持ち、私の欠点を許し私からの愛を受け入れてくれるように祝福して下さい。この世において、私も娘と同じ子供であることを知ってくれるように導いて下さい。そして私たちが困難なことに遭ってもお互いに助け合えますように。」

両親がひそかに行なう祈りもなくてはなりません。しかしいつも秘密にすぎず、子供に父母は祈らなくても大丈夫なんだと思わせるようであってはいけません。父や母がひざまずいて問題の答えを求めて祈る姿を、子供が時々見かけるようであってほしいものです。何を祈っていたのか聞かれたと

ときには、「レッスンの準備で神さまの助けが必要な。それで助けて下さるようにお祈りしたのよ」と簡単に答えます。

両親は、すべての問題に解決を急ぎすぎはいけません。「私はあなたにどう助言したら良いか本当にわからない。時間をちょうだい、お祈りしてみるから」と子供に言って下さい。本当は知らないくせに大人はどんな答えも知っているふりをすると、十代の子供は大人をよく批判します。問題を理解せず、性急に助言やありきたりの忠告を与えると、子供にそう思われてしまうのです。若い人たちは、みたまの導きがなければ、大人でも道を見失ってしまうことがあることを知らなくてはなりません。

子供を立派に育てること以上に大きな責任は、両親にあります。私たちのまわりにいる問題を持つ家庭を見ればわかるように、両親だけでは問題に対処できません。ひざまずいて謙遜に祈るときこそ、家族が最も一致し、みたまと調和するときです。両親はこのすばらしい神聖な時間を使って、証を述べ、愛を語り、教えることができます。――祈りを通して。

ホーム・ティーチャーの責任

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

ホーム・ティーチングは、人々に福音を教え、実践を促す3つの面を持った主のプログラムの中で何にも凌駕されない大切なものである。

主は人々に教えるにあたってまず予言者に福音をあらわされた。モルモンによれば、神御自身と神からつかわされた御使いが、「主の選びたもう者にキリストの御言葉を伝え、その者たちにキリストの事を証させる……」のである。

モルモンは続けて言う。「主なる神がこのように天使らを使ったもうによって、右の選ばれた者以外のすべての世人もキリストを信じてその心に聖霊を受けることのできる道が備えられるのである。」(モロナイ7:31, 32)

この方法に沿って、主は最初の神権時代にアダムに福音をあらわし、この最後の神権時代にも予言者ジョセフ・スミスにあらわされたのである。主は同様にアダムの時代と予言者ジョセフの間の他のすべての神権時代の予言者にも福音をあらわされた。

主は人々に教えるにあたって第2に、両親が子供に福音を教えることを求められた。アダムにはこう言われた。「……われ汝に一つの誠命を与えてこれらの事を汝らの子らに自由に教えしむ。」(モーセ6:58)

主は後の神権時代でも、必ず同様の戒めを与えておられる。この最後の神権時代の初期に主は言われた。

「……シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八歳の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。

およそシオン、またはその組織せられたるステーキ部内に住める者の律法はかくの如し。……

また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」(教義と聖約68:25, 26, 28)

しばらくして、主は指導的な立場に立つ一部の兄弟に、戒めを受けたにもかかわらず子供たちを「光明と真理」のうちにて育てていないことを責め、今なおこの罪に定められていると指摘された。(教義と聖約93:39-50参照)

主は人々に教えるについて第3にその責任を教会に課せられた。教会はこの責任を果たすため数多くの組織や機関を設け、いろいろな活動を実施している。神権定員会、神権会、聖餐会、系図や神殿の仕事、福祉活動、伝道活動、教会が経営する学校、インスティテュート、セミナリー、補助組織とその活動などがそれである。

教会はまた両親が家庭で福音を教えるのを奨励するため、毎週の家庭の夕べで活用できるすぐれたテキストを発行している。



神権者にとって、もう十分働いた、と言える
ときは決してないのである。そのようなとき
は将来も決して来ないだろう。

上に数多くのプログラムや活動をあげたが、ホーム・ティーチングは入っていない。なぜだろうか。それはホーム・ティーチングが他のものと明らかに違ったものであるからである。私たちはこのことを承知していなければならない。ホーム・ティーチングは福音の特定の原則や特定の教会活動に限定されるものではない。神の命によって、ホーム・ティーチングは、家庭と教会のすべてのプログラムを支持し、福音を教える活動を助けようとしている。

それではホーム・ティーチングとは一体何だろうか。

ホーム・ティーチングは正しく行なわれている限り、各会員の家庭に神から召された2名の神権者を送る制度である。この神権者は権能のある神権指導者と監督によって召され奉仕するのである。この神権者であるホーム・ティーチャーは主イエス・キリストを代表して各会員の福祉を見守り、すべての会員が家族の一員、および教会員として義務を果たすように激励し、また靈感を与える重大なしかし栄光に輝く責任を負っている。

ホーム・ティーチャーの具体的な責任をあげてみると次のようなものがある。

まず第一に最も大切なことは、いつも聖霊の導きを受けられるような生活をし、ホーム・ティーチングの責任を果たすにあたっては、聖霊の靈感に従って行動することである。

第二に、すべての会員が各自の分を果たして家庭を真実の末日聖徒のものにするよう勧め、また鼓舞すべきである。

一つ一つあげれば次のようなものがある。まず両親が神殿で結び固められていること、誓約のもとに生まれていない子供たちが両親に結び固められること、今から行なわれる結婚は神殿で行なわれること、朝晩家族の祈りを捧げること、同様に個人の祈りも確実に捧げること、福音の標準と実践についても理解し、取り入れること、家庭の夕べを毎週開いて提供されたレッスンを活用していること、啓示の教えるところに従って子供を祝福し、バプテスマを施すこと、神権の聖任を受ける用意ができていて、正しい時期に受けること、神権者は神権会に出席すること、毎週欠かさず聖餐会に出席して

いること、教会が各個人の物心両面の成長のために設けている組織と活動に各自参加していること。

ホーム・ティーチャーは愛の精神から喜んで、強いられることなく家族や、家族各員の必要と希望に応えなければならない。また同様に監督や神権指導者の指示に従わなければならない。

ホーム・ティーチャーは、神権指導者が監督と相談し、承認を得た後、神権指導者から召され、神の委任を受けているのである。ホーム・ティーチャーを導くものは、教会幹部が大管長会の指導の下に進め指示しているホーム・ティーチングプログラムである。しかしこの制度と実施の責任は上記の主の僕が思いついて始めたものではない。これは主御自身の意志に端を発していて、主から啓示されたものである。

ホーム・ティーチングを行なう責任は、メルケゼデク神権あるいはアロン神権の中の教師と祭司の職に召されるときに付随して与えられる責任である。すべての神権者は「神権につける誓詞と誓約」に沿って召しを尊び、よく果たそうと思えば、正式に割り当てられたときすぐにホーム・ティーチングの召しに応える責任がある。主は教義と聖約20章でこう述べておられる。「使徒は長老にして…教会を守護…することを以てその天職とす。」(38, 42, 44節)

「祭司の義務は、…各会員の家庭を訪れて、彼らが声を挙げてみてもひそかに祈りを為し、すべて家庭の務めにいそしむよう勧めをなすなり。」

「すべてこれらの義務に於て、祭司はもし必要あらば長老を助くべきものとす。」(46, 51, 52節)

祭司は各会員の家を訪れて、祈りとすべての家庭の務めにいそしむように勧めて、長老を助けるようにというこの文は「教会を守護する」長老の責任の中に上記の事柄も含まれていることを示している。この文はまた祭司の責任をも具体的に記している。

「教師の義務は常に教会員を守護し、彼らと共にありて彼らを強くすべきものとす。

また教会員の中に邪曲なきよう、互いの間に頑固なること

神権者各自がホーム・ティーチングに関してキリストの武器を身につけるときは正に今である。神の人らしく立ち上がり、必要の度ごとに鼓舞する義務を果たすべきである。

のなきよう、また虚言、陰口、悪口などもなき様注意すべきものとす。

「また教会員のしばしば集会することをはかり、またすべての会員にその義務をつくすようになさしむ。」(53-55節)

主は使徒の時代の教会にも同様の責任を与えたもうたに違いない。ペテロは次のように記している。

「そこで、あなたがたのうちの長老たちに勧める。わたしも、長老のひとりで、キリストの苦難についての証人であり、また、やがて現れようとする栄光にあずかる者である。

あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。しいられてするのではなく、神に従って自ら進んでなし、恥ずべき利得のためではなく、本心から、それをしなさい。

また、ゆだねられた者たちの上に権力をふるうことをしないで、むしろ、群れの模範となるべきである。

そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう。」(I ペテロ 5：1-4)

大切なことはホーム・ティーチングが神からの召しであるということだけでなく、メルケゼデク神権者と祭司および教師に共通の召しであるということである。

教会の責任に召されていてホーム・ティーチングを免除された神権者がいるかどうか聖典を繰ってみたが、そのような神権者はひとりもないことがわかった。大管長会の署名が入ったホーム・ティーチングの手引きには次のように記されている。「ホーム・ティーチングの先輩同僚には、ふさわしい長老、七十人、大祭司を召す。……監督は後輩同僚にメルケゼデク神権者かアロン神権者を召すことができる。」

1914年4月の大会でジョセフ・F・スミス大管長は、ホーム・ティーチングを特に取りあげて次のように言われた。

「最近私たちは次のことに注意を喚起した。それは、教会で長い間働いてきた一部の人が、実にある人は教会の中で生まれ育って神権定員会で高い地位についているにもかかわらず、会長やその人の住む地域の監督から、聖徒たちを訪れ福音の原則を教えて、教師としての義務を果たすよう要請されると、そのような召しはとうの昔に卒業しているから今さら

教師として働く責任は断わる、と冷淡な返事をしていることである。チャールズ・W・ペンローズ兄弟は82歳である。私は間もなく76歳になろうとしている。私は上のような小神権の義務を卒業した兄弟たちより年上であるが、召されれば私たちは一人残らずまだまだこの年でも教師として働けると先程の兄弟たちと会場の皆様に申し上げたい。末日聖徒イエス・キリスト教会の神権者にとって、もう十分働いた、と言えるときは決してないのである。そのようなときは将来も決して来ないだろう。生命の続く限り、またシオンの建設と人類の福祉のために尽くし、働く能力がある限り、私たちは義務の大小にかかわらず求められることを喜んでてきばき果たすべきである。」(「福音の教義」第1巻P. 228, 229)

教会が組織されて間もない初期の頃、兄弟たちがこの責任をどれくらい真剣に文字どおり行なっていたかを示すため、次のウィリアム・カフーン長老の言葉を引用しよう。カフーン長老はホーム・ティーチングの責任を明らかにした啓示が与えられてから6カ月半たった1830年10月16日に教会に加入している。

「私はワード・ティーチャーとなって聖徒の家族を訪れるように召され、任命された。責任は立派に果たせていたが、予言者の家を訪問しなければならぬことに気がついた。まだ17歳の若さであったので〔ウィリアム・カフーンは1813年生まれであった〕、私は教師として予言者の家を訪問するのがこわく感じられた。そして、この責任を返上しようと考え始めた。〔私も小さい頃ジョセフ・F・スミス大管長の家のワード・ティーチャーに任命されたことがあるのでこの少年の気持がよくわかる。〕しかし結局予言者の家に行ってノックすると予言者はすぐ戸口に出てきた。私はそこに立ちつくして、ふるえながら言った。『ジョセフ兄弟、ワード・ティーチャーとしてお伺いしました。お差支えなければお邪魔したいのですが。』彼は答えた。『ウィリアム兄弟、どうぞお入り下さい。よく来て下さいました。その椅子に腰かけて下さい。今家族を呼んできますから。』

程なく家族が入ってきてすわった。予言者は『ウィリアム

「ジョセフ兄弟、ワード・ティーチャーとして
お伺いしました。お差支えなければおじゃまし
たいのですが」と少年は言った。

兄弟、さあ私も家族も謙遜に正直な気持で集まっています』
と言ってすわった。『どうぞ聞こうと思うことを皆たずねて
下さい。』

恐れもふるえもとまっていた。そこで私は言った。『ジョ
セフ兄弟、あなたは自分の信仰を実践する努力をしています
か。』

彼は答えた。『はい。』

そこで私は、『家族と一緒に祈っていますか』と聞いた。

彼は『はい』と答えた。

『家族に福音の原則を教えていますか。』

『はい、教えるよう努力しています。』彼は答えた。

『食事の前に祝福していますか。』

『はい。』

『家族と仲よく平和に暮らしていますか。』

彼は仲よく暮らしていると答えた。

私は予言者の妻エマ姉妹の方を向いて言った。『エマ姉妹、
姉妹は信仰に忠実に生きようと努めていますか。子供には両親
に従うよう教えていますか。祈るように教えていますか。』

この質問にエマ姉妹は、『はい、そうするように努力して
います』と答えた。

次に私はジョセフ兄弟の方を向いて言った。『ワード・テ
ィーチャーとして質問することは全部すませました。今度は
私に何か忠告があればおっしゃって下さい。』

彼は言った。『神があなたを祝福されますように。あなた
が謙遜であって忠実であれば、ワード・ティーチャーとして
働くときに直面するあらゆる問題を解決する力が得られるで

しょう。』

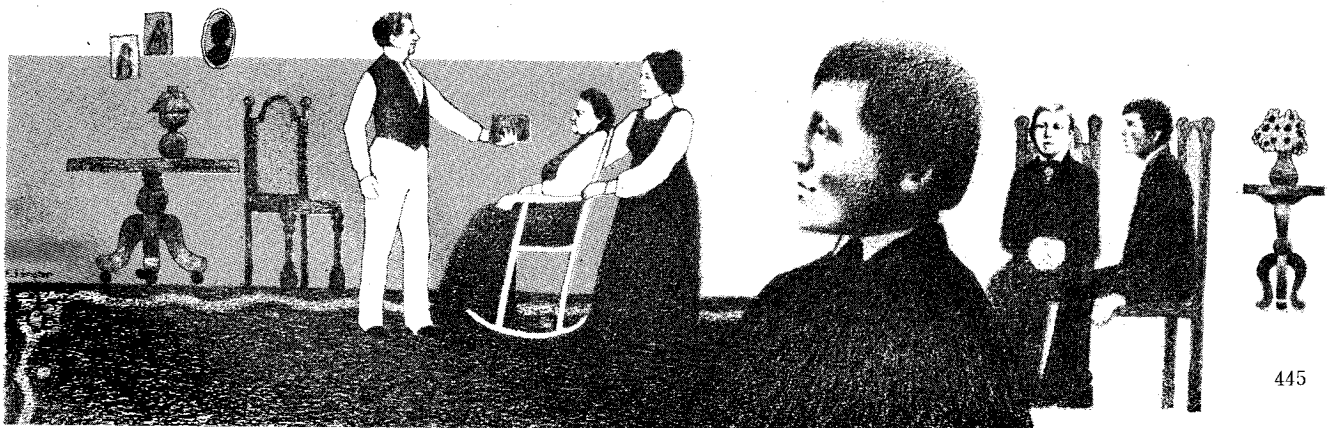
そこで私はワード・ティーチャーとして予言者と家族の上
に祝福があるように言って、別れを告げた。』（「ジュブニー
ル・インストラクター」27巻、P.492）

大管長は代々常にホーム・ティーチングを真剣に考えてき
た。

マッゲイ大管長はこう述べている。「ホーム・ティーチン
グは、……神の子供たちを育て、導き、靈感と助言を与える
ための最も大切で、最も報いのある機会の一つである。…神
聖な務めであり、召しである。すべての家庭、すべての人の
心に、神から与えられた靈感をもたらすことが、ホーム・テ
ィーチャーとしての義務である。この業を愛して私たちの最
善を尽くすなら、神の子供たちを教える献身的な教師として
私たちにはかり知れない心の安らぎと喜び、満足がもたらさ
れるであろう。」（「ホーム・ティーチングの手引き」序文）

神権者各自がホーム・ティーチングに関してキリストの武
具を完全に身につけるときは正に今であると私は感じてい
る。神権者は神の人らしく立ち上がり、守護するように任さ
れた会員の家庭をすべて必要なだけ訪問し、各会員に主が望
まれるような生活をするよう勧め、鼓舞する義務を果たすべ
きである。

主から「良い忠実な僕よ、よくやった」とおほめの言葉を
いただけるほどこの召しを果たすためには、ひとつの義務と
して果たすだけでなく、愛する救い主の真実の精神に沿って
献身的な愛から、またお互いの永遠の生命を心から願って尽
くすのでなければならない。

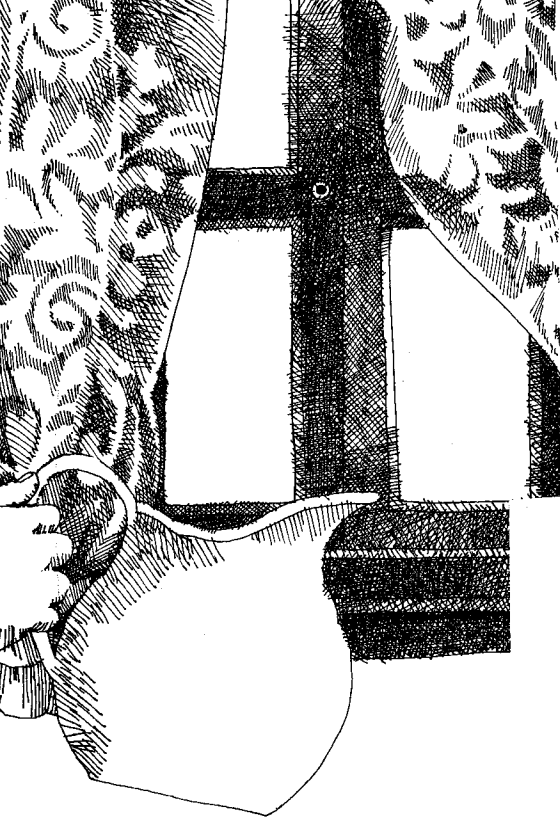




異国人

(フィクション)

ジェーン・ルーティス・ハウザー



彼女は背が小さく丸ぼちゃでかなり不器量だった。そのため若くて向こう見ずな私たちはいつも彼女をからかっていた。

無論私が一番のいじわるだった。彼女の歩き方から話し方、顔のいろいろな表情や手の動かし方にいたるまで細部にわたって覚え込み、こもるような話し振りや訥々とした独特の言いまわしを、ほぼ完璧に真似することができた。リバシ夫人はフランス語文法を支離滅裂に使うことにかけては並ぶ者がなく、20年も前にイタリアから移ってきたというのに、言葉には故国語の抑揚とはねるような調子が抜けきらないため「ほぼ完璧」と言ったのである。

私たちが彼女を見るのは、ラ・バティー・ローランというめったにない名前前の村のアンジュリン叔母の家へ出かける毎年の夏休みの数カ月間だけだった。この村はちっぽけで名もない汽車さえ通らない村だったが、私たち子供

にとってはその音と匂いと色彩のすべてがしあわせそのものだった。ラ・バティーの夏はいつもすばらしかった。叔母は私たちをととも甘やかしたし、「町の人たち」というので、私たちはきまって関心の的となった。

それにアンジュリン叔母は、村では風変わりな人物で通っていた。若いときにインドや中国という遠い国への旅行をやったのけたので、珍重すべき変人というレッテルを張られていた。叔母の家は小さくきれいで、数々の旅行の記念品がいっぱいあった。子供の目には、どこに足を踏み入れても新しい冒険や新しい発見ばかりだった。

アンジュリン叔母の仲間は、7匹のいばりくさった猫と数匹のうさぎだけだった。猫は愛玩用でうさぎは料理用だった。

小さなリバシ夫人は叔母のすぐ隣の道に面したひと間の家に住んでいた。その1部屋はいろいろな用途に使われていた。台所、パーラー、寝室、書き物をする場所、ヤギの寝場所。

あの夏、私たちは自分からではなく強制的にラ・バティーへ行かせられた。その年に、私は17才の年頃特有のとりすました気取り屋になっていて、世なれた自分は田舎には向かない、もう田舎に行って貴重な時間を浪費すること

はやめよう、と自分に言い聞かせていた。ところが戦争やマルセイユへの激しい爆撃のため、私の全計画は180度の変更を強いられた。

ラ・バティーでの初めの1カ月は何事もなく過ぎたが、連合軍が南へくぐるにつれ、戦闘は激しさを増していった。ドイツ軍は退却しながら鉄道の線路や橋を破壊したので、マルセイユとの連絡はすべて途絶えた。父と私たちとの連絡や、農民との唯一の取り引き手段である砂糖や米や油や石けんの補給が不可能になった。そのときまで農民はたいがい喜んで私たちと取り引きをしたが、手持ちの品が底をつくと彼らの気持も離れていった。突然に村中が奇妙な病気に襲われたようだった。植物は成長をやめ、鶏は産卵をやめ、うさぎは子を産まなかった。村人の顔も家々の戸口もびしゃっと冷ややかに閉じられた。

そんな日が2、3週間続いたある日私たちはマルチン家で前の日の午後豆の収穫があったと聞き、1ポンドでも2ポンドでも売ってもらえたらと、彼の農場へ急いだ。マルチン氏は他の農夫と同じように現金には興味がなく、物を交換するだけだった。私たちのタイミングが悪かったに違いない。というのは私たちが彼の農場についたとき

彼が昼寝をしたがっていたことはだれの目にも明らかで、豆は売らないとそっけなく断われたのである。そこで恥ずかしがり屋の母がありたけの勇気を奮い起こして、収穫のすんだ畑に行ってみつかれるものを拾ってよいでしょうかと許しを乞うた。

1年でも最も暑い時期だったはずである。そんな時間に外へ出るのは無鉄砲な町の間人くらいであろう。空気は重苦しくまとわりついて、虫の子ひとつ見られなかったことを覚えている。土は厳しい暑さでひびが入り、深いみぞができていた。そのように蒸し暑い中で、私たちは膝をつき、ひとつ、ひとつ、またひとつとしなびた豆を集め始めた。動作はすぐのろくなって、疲れが極限に達し、私たちは地面にへばりついて畝から畝へはい歩いた。

焼けつくような地面にうつぶせている妹や母を見たときに私の胸に突き上げてきた深い悲しみは、とても表現できない。今になってもあのかのころのことを思い出さずにつけ、やりきれない心の痛みを覚える。妹の顔の真剣さは幼くない子としては尋常一様でなく、私は彼女がことの大切さを知っているのを見てとった。豆集めの間中、私たちはため息も不平も出さず終始無言だった。私たちは暗黙のうちにすべてを了解していたのだった。

私は初めて、母がひどく痩せてやつれたことに気づいた。食事ときには、子供にたくさん食べさせようとしておなかのすかない振りをしていたことを思い出し、胸が痛んだ。私はそれまで気がつかずにわがままだったことを後悔する気持ちでいっぱいになった。

あごは土にまみれ、ぎらぎらと照り

つける太陽が目を射り、汗が泥だらけの顔に跡を引いて流れるまま腹ばいになっていると、屈辱的な経験をさせたマルチン氏のことが心に浮かび、私は一生でたった一度、心の底から彼をさげすんだのである。

私たちは足のつま先からまつ毛まで灰色に汚れ、やっとのことで苦しい労働の末に5ポンドの豆を集め終り、我家に向かった。その途中でリバシ夫人の家のわきを通らなければならなかった。母がリバシ夫人は昼寝をしていてくれたらいいのと言ったのを思い出す。私たちは恐ろしい恰好だったからである。しかし夫人は私たちを見てドアの所にすっ飛んで来て叫んだ。「まあ、かわいそうに！ どうしたというの。」それは、私たちが孤独な長い1カ月間に初めて見た同情の仕草だった。彼女のやさしい声がこらえていた感情に火をつけたに違いない。私にはくやしかったが、母はわっと泣き出した。リバシ夫人は、やさしくしっかりした態度で母をひと間きりの家へ通した。

丸っこい体に似合わずきびきびした動作で、彼女は私たちに食事を運んできた。ヤギ乳のチーズ、焼きたてのパン、井戸から汲んだ水、あのようにおいしい食事は決して二度と味わえないだろう。私たちの不運を話して聞かせながら母もリバシ夫人も泣いていた。情け深い夫人はそれから自分の持っている物を皆私たちにくれた。私たちが食料の代金を払おうとすると彼女は不審そうな顔をした。結局私たちは彼女の気分を害さないために好意をそのまま受けるしかなかった。

どれだけそこにいたかは覚えていない。覚えていることと言えば、そこを

離れたくない、動きたくないと思ったことだけである。私たちのまわりの部屋はきちんと片づき、真新しかった。私はそれまで夫人の欠点ばかりを捜していた。彼女の家がどんなにきれいに磨かれており、彼女がどんなに魅力ある人かということに、どうして気づかなかったのだろう。リバシ夫人と母は部屋にひとつしかない窓の所に立って腰かけ、低い声で話をしていた。妹はテーブルを立ててヤギを熱心にながめ私はひとりで思いにふけた。考えることはたくさんあった。拭い去らなくてはならない多くの偏見があった。私はこの数時間で非常に多くのことを学んだ。それは一生の勉強だったのだろうか。

自分の国の人がみんな立派ですばらしいわけではなく、美德は限られた階級の人々や一国の人だけにあるのではないことを苦しい中で悟って、私は大人になった。教育に欠けることが心の豊かさや理解力の欠如を意味するわけではないことを、いやおうなく思い知らされた。私はある程度許容することを学び、その中で若者の夢の幾つかを失った。しかし今や、前よりも苦しみに耐えられるようになった。

涼しい部屋とテーブルに載ったリンゴの強烈な香り、母たちの話し声が心地良かった。ヤギのおどおどした咳払いさえ楽しい音に聞こえた。

夕暮れが静かに柔かく部屋に射し込んできた。開かれた窓越しに空ははなやかさを失い、私は輝きの残るうちにこの今をしっかりとつかまえ、若かりし去年の夏のあの夢を心に刻まなくてはならないことを知ったのだった。

私はドイツで生活していたときに、福音に対して気持ちが迷っている自分に気づきました。私は全員が教会員ではない家庭に育ち、教会外の人と結婚していました。ちょうど第2次世界大戦のときでした。私は、自分に証があるかどうかをはっきりさせようと決意しました。そして聖典を読み、祈りと断食の答えとして、教会と共に生きようという燃える望みを得ました。

でも、私はいつも什分の一のことを間違えていました。結婚後は働いていなかったのですが、断食献金を払うだけで良いと思っていました。夫がヒットラー政権の下で働くようになったとき、私に政府からお金が与えられ、再び什分の一のことが問題になってきました。私は3週間以上の間迷いました。私はだれの所にも相談に行かず、ただ聖典を読みました。

「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさいと、万軍の主は言われる。」(マラキ3:10)

私はどのようにしたら主の約束が受けられるのかを知りたくて、このことについて祈りました。その答えはすばらしい方法でもたらされました。

ある朝、夜明け時に目を覚ました私は、再びまどろみました。そして夢を見ました。支部長が町中のモルモンを呼び集め、聖徒はこれから約束の地へ

行くと言いました。そして私たちに集会所に集まるようにと言いました。私は自分に資格があると考え、必需品を荷造りしてふたりの子供を連れ、会場に向かいました。

夢の中では活発な教会員のほかに不活発な教会員も大勢いて、自分のバプテスマ証明書を教会員であることの証拠として持っていました。間もなく支部長が「生命の書」と書かれた大きな書物を持って到着しました。この本の中に、シオンへ行くのにふさわしい人の名前が載っているのです。その名前はごく少数で、呼ばれた人は別の部屋へ行きました。支部長が本を閉じると、残った私たちは不平不満を述べました。私たちは何が悪くてこの部屋に残されたのかわかりませんでした。私は悩み、悲しみました。そして自分の

破った戒めは何かと考えました。

私はふたりの子供を連れて、自分が忠実な教会員ではなかったのかわかろうと、支部長に聞きに行こうと決めました。彼は、あなたは忠実でいつも自分の分を越えてまで人のために尽くしてきたと答えました。「きっとあなたの名前を見落としたのでしょう。」彼は3回も名前がないか調べてくれました。でも、私の名前は見あたりませんでした。支部長は私の目を見つめて尋ねました。「スーカー姉妹、あなたは什分の一を納めていましたか。」

このとき、私は目がさめました。この経験で体がしびれ、私は胸に燃えるものを感じました。私は床にひざまずいて祈りが答えられたことを主に感謝しました。このときから、私は「什分の一全部を主の倉に携えて」行こうと決心しました。

まもなく、「これをもってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みを、あなたがたに注ぐか否かを見なさい」と主の言われた約束が成就し始めました。当時私は、食料品のほとんどを姑につけて借り、その分の借金は多額になっていました。戦争中のことで食料は高騰していました。私が支部長に什分の一を払い終え、喜びに顔を輝かせて姑の家を訪ねると、驚いたことに、姑はいつもの倍の食料をかごに詰め、食料品のお金は一切いらぬと言ったのです。

これらの経験は、私の生涯の転機となりました。

姉妹、什分の一を納めていましたか

合衆国ニュージャージー州
アーリントン

エリザベス・スーカー

新しい
教会本部
ビル



1年前は教会の各部門がソルトレーク市内に散在していて遠いものは60キロメートル以上南のプロボにあるブリガム・ヤング大学に所在していた。そのため、教会本部を訪れる多くの人は、仕事を処理するのに広い地域をあちこちかけまわらなくてはならなかった。このたび新しい教会本部新館が落成し、1973年2月には、それまで16の建物に分散していた36部門がひとつ屋根のもとに集められた。この移転には運送会社6社の手を要した。

部門の集中化で、その他の事務の混雑がかなり緩和された。教会本部旧館から歴史記録部、伝道部、および管理監督会の機能の多くが移されたことで、教会本部旧館にまだ事務室のある教会幹部の事務環境が良くなった。

単位面積あたりの費用は、6年前に建設された近くのケネコットビルよりも若干安い程度であるが、インフレと地価の高騰を考えれば建設費は驚くほど安いと言える。

集中ユニット設備により建物全体の使用電力量がわかるので、それによっても経費が軽減できる。電力の需要が増すとオペレーターが不必要なモーターを停止するため、月に何千ドルもの節約になる。

また、石の窓扉は美観になるばかりでなく、窓に太陽光線が照りつけるのを防ぐので、冷房経費が少なくてすむ。

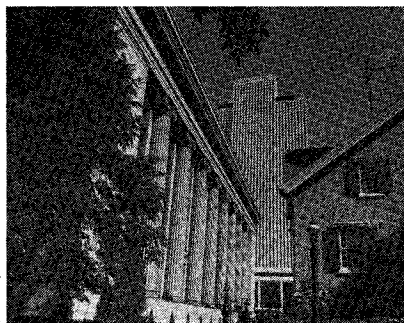
建物の収容能力は2,000人である。しかし現在は使用可能スペースの85パーセントだけが割り当て済みで、あとの15パーセントは将来の業務拡張のために取っておかれる。

建物の地下には3階にわたって1,250台の車が駐車できる。ロビーの右下の地下1階には、700名入れるカフェテリアがあり、教会職員や歴史図書館、系図図書館、参考図書館の来館者や近くの宣教師館の宣教師たちが利用する。

メインフロアには15台のエレベーターがある。3台は駐車場からで、6台は1階から14階用、あとの6台は14階まで秒速5メートルの速さで昇り、15階以上に使われる。

この夏、庭師が新館と旧館の間の広場の造園を始めた。一般に開放されるこの広場からは威容を誇るソルトレーク神殿の東正面が見え、この地域一帯はソルトレーク市の教会建物群の中心となっている。

中央庭園の圧巻は美しい噴水と、新館の南側壁に刻まれている西半球と東半球の大理石の浮彫りを映す池である。この両半球の地図は全世界にわたる教会と、万国の民に福音を伝えるという、末日聖徒に与えられた大切な使命を象徴している。



教会事務局の歴史

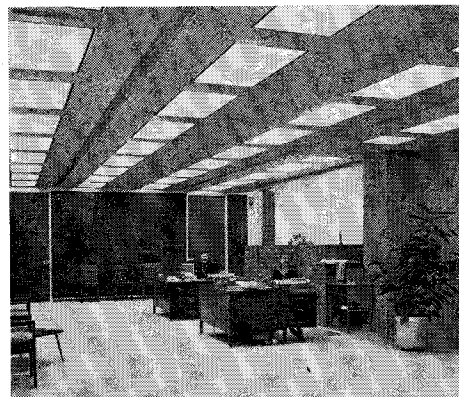
1848年、ダニエル・H・ウエルズにより、ソルトレーク市に初めて教会事務局の建物が建てられた。間口と奥行が5.5メートル、3.7メートルで、木材と土でできた傾斜屋根の建物であった。

1848年から1850年にかけて「ホワイトハウス」とも「マンションハウス」とも呼ばれる建物が建築され、ブリガム・ヤングの家としても使用された。

1852年には、教会の建築家トルーマン・O・エンジェルにより、「プレジデント・オフィス」が建てられた。サウステンプルストリートのビーハイブハウスとライオンハウスの中間に位置するこの事務所は、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、ウィルフォード・ウッドラフ、ロレンゾ・スノー、ジョセフ・F・スミス各大管長の時代に大管長会の事務所として使われた。この1852年から1917年までの時代に、教会員数は7万から48万8千46に増大した。

1917年に建造された教会本部ビルは42.7メートル×22.9メートルの大きさである。もとは教会幹部に限らず、系図協会等幾つかの補助組織が使っていた。それ以外の補助組織は、1962年の夏の取り壊しまで現在の教会本部新館の位置にあった管理監督会建物に入っていた。

教会員数が増し、教会の諸業務がそれに比例して増えるにつれ、それまで教会本部旧館に所在した各部門が近くの建物に引越し、分散したままで教会本部新館の完成を待ったのである。





「ホワイトハウス」あるいは
「マンションハウス」



「プレジデント・オフィス」



「教会本部旧館」

教会本部新館

			28	空室		
			27	空室		
			26	応接室, 会合室		
			25	外務伝達部, タバナクル聖歌隊		
			24	内務伝達部, 教会誌購読		
			23	教会誌編集部, 製図, 写真		
			22	管理会および委員会室, 機械室		
			21	教育資料編集部, 翻訳部		
			20	日曜学校, 初等協会, 音楽委員会		
			19	M I A		
			18	管理監督会, 健康		
			17	会員記録および統計		
			16	財務部, 監査		
			15	財務部		
			14	休憩室, 応急医療室, 人事, 給与支払		
			13	中央購買部, 機械室		
			12	伝道, 用度, 不動産		
			11	建築部, 施設管理部		
			10	建築部		
			9	教会教育		
			8	社会奉仕		
			7	ホーム・ティーチング, 軍務, 福祉		
			6	系図協会図書館分館用資料, 機械室		
			5	系図協会神殿索引局, 手引書作成		
	西翼					東翼
	系図協会					歴史記録部
4	系図協会図書館, 記録保管所			系図協会神殿記録検査管理		教会記録保管所
3	系図協会図書館			系図協会記録検査, システムコントロール		教会記録保管所
2	系図協会図書館管理事務所			系図協会管理事務所		調査室
1	系図協会図書部, 受付, カードカタログ			メインロビー		講堂 中央参考図書館
地階	1	駐車場		郵便物取扱所		カフェテリア
	2	駐車場		印刷局		施設局
	3	駐車場				



小さな お友だちへ

管理監督
ビクター・L・ブラウン



私のお父さんとお母さんはアルバータ神殿がたつ前に、カナダで結婚しました。ですからふたりは神殿結婚をしていませんでした。私はその神殿が完成して^{けんどう}献堂される約9年ほど前に生まれました。そして子供ながら、主の^{みやい}宮居に行って両親に結び固められたいと心から願いました。私は神殿で結び固められる祝福にあずからなければ、死んだあとで家族といっしょに住むことができないことをはっきり知っていました。

神殿が^{けんどう}献堂されてすぐ、両親が私と弟を神殿につれていってくるとやくそくしてくれたとき、私の心は喜びでいっぱいになりました。ところが神殿に行くことになっていた日の前日、私は病気になり、お母さんは私が良くなるまで神殿に行くのは待つ方がいいと言いました。私はそのときどんなにはげしく泣きながら、神殿に行く日をのばさないでくれるようお母さんに頼んだかを覚えています。お母さんも最後は願いをききいれ、みんなで神殿に行くことになりました。

私はあのときひどくふらふらしながらも、弟やほかの子供たちといっしょに子供部屋で待っていました。やがて係の人が来て弟と私を結び固めの部屋につれて行きました。そこで私たちは^{さいだん}祭壇の前に共にひざまずき、弟と私の手は、両親の手に組み合わせられました。権能のある人が私を永遠にお父さん、お母さんに結び固めたとき、私はあたたかい平和な^{しょうがい}気持になりました。これは私の生涯で一番すばらしい

経験となりました。というのは、もし私が天のお父さまのいましめをぜんぶ守るなら、永遠に家族といっしょにいられるからです。

神殿でこのすばらしい経験をした次の朝、私はまたぐあいが悪くなりました。医者はしょうこう熱と^{しんだん}診断しました。私たちはその前の晩に神殿でいっしょだった子供たちのことをとても心配しました。さいわいだれも病気がうつった人はいませんでした。私は、心から望んでいたことがのばされずにすみ、まただれも私の病気がうつって苦しむ人がいなかったのは、天のお父さまの恵みだったと確信していま

す。

みなさんも両親や日曜学校そして初等協会の先生の教えに耳をかたむけるなら、私と同じように、自分と地上のお父さん、お母さんとのつながりだけでなく、天のお父さまとのつながりもよくわかってくるでしょう。

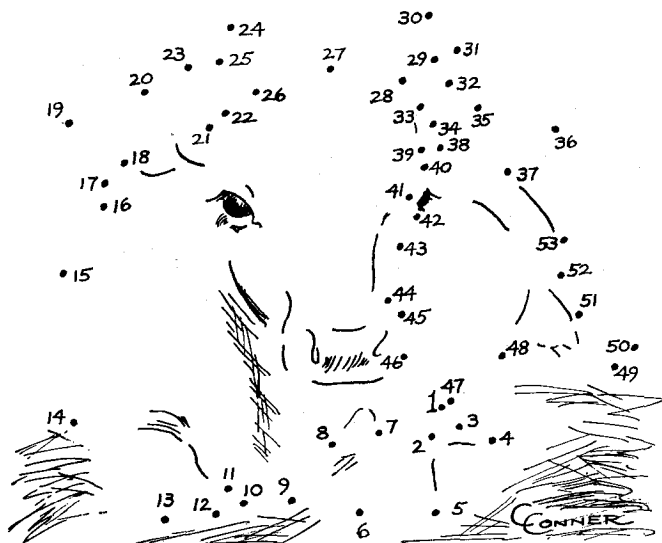
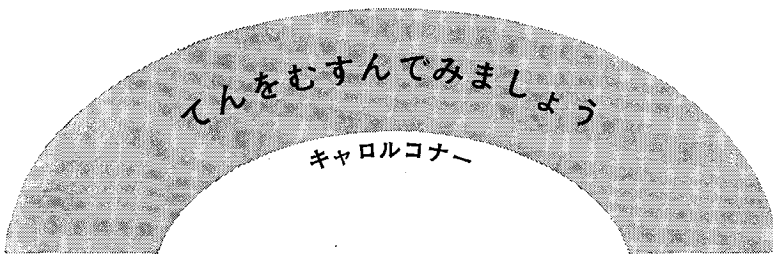
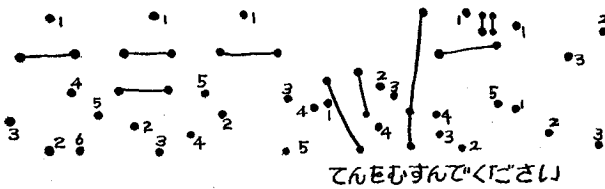
主がご自分の子供たちすべてに与えられた最も大きな祝福は、家族のつながりを永遠にたもつことができるという祝福です。

両親に結び固められた子供たちは、もし家族のみなが天のお父さまのいましめを守り、正しい生活をするなら、永遠にわたって家族と共に住むことが

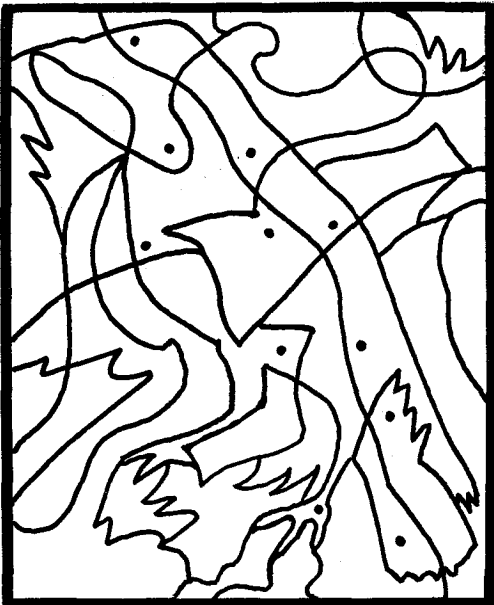
できるのです。

両親が神殿に行ったことのない家の子供たちも、家族の結び固めを受けるために神殿につれて行ってくれるよう両親にたのむことができます。

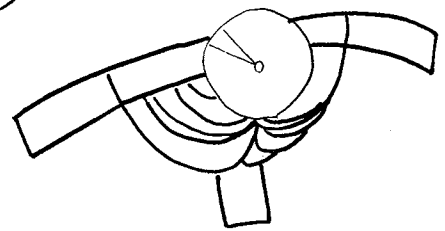
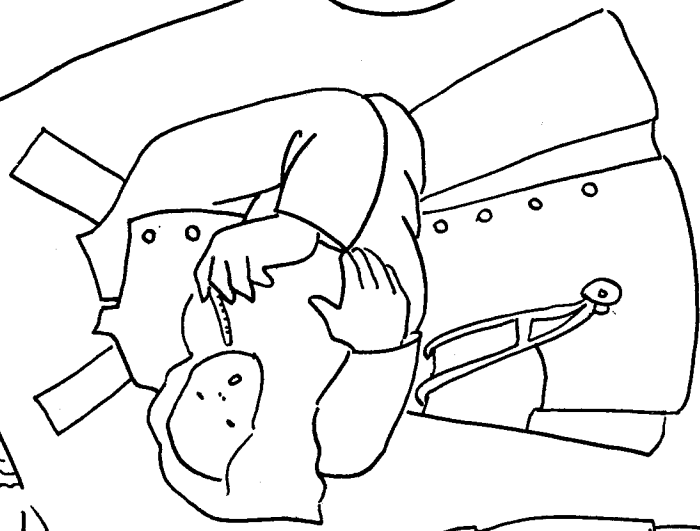
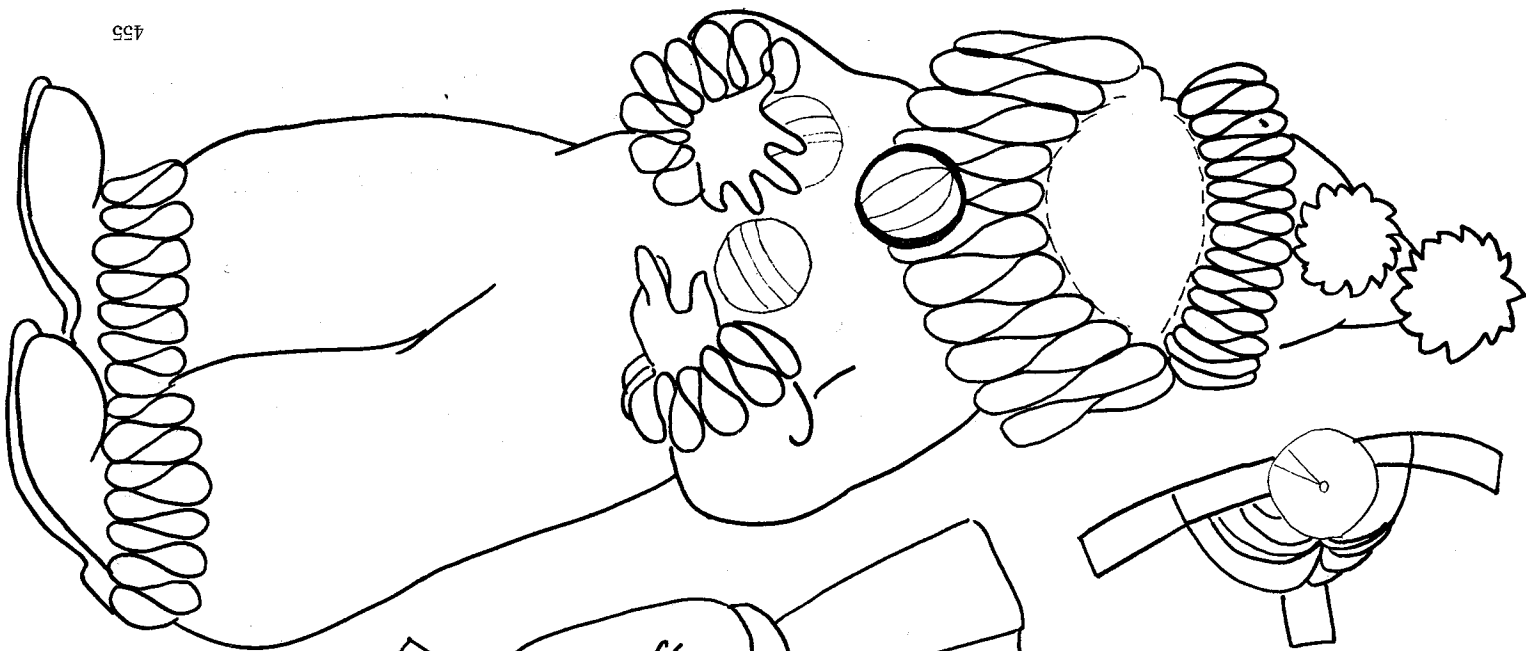
私たちが子供として救い主の説かれた教えを学んでいるなら、いつの日か主の宮居みやいに行くための準備をはじめなくてはなりません。天のお父さまの計画は私たちひとりびとりが永遠の家族の一員となるための計画です。私たちはみな神さまの子供です。神さまは私たちを愛し、私たちが神さまのところへもどって家族といっしょに住めるよう望んでおられるのです。



わたしはなんでしょう
キャロルコーナー

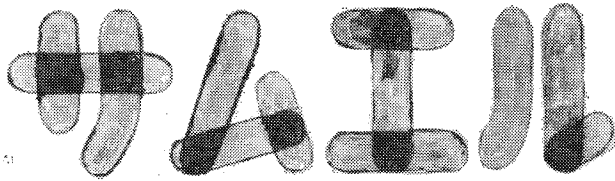


てんのついているところを
そめてみましょう



シユテイ・ケイブナ-

かみにんぎょう



絵 ジェリー・ハーストン

ハンナは長いあいだ赤ちゃんをほしがっていました。ある日神殿の中でハンナはこう祈りました。「主よ、もし私に男の子をあたえてくださるなら、その子を一生のあいだ主にささげます。」

主はハンナの祈りをききとどけられ、ハンナに男の赤ちゃんをさずけました。ハンナはその赤ちゃんにサムエルと名づけました。

サムエルが大きくなって神殿で手伝いができるようになると、ハンナとお父さんのエルカナはサムエルを神殿につれていき、祭司のエリといっしょに住まわせました。

サムエルのお父さんとお母さんは毎年神殿にいる息子むすこにあいに行きました。そしてそのたびにお母さんは小さな上着うわぎを作ってサムエルに持っていきました。

ある晩、サムエルがねむっているとだれか自分の名前をよんでいるのが聞こえました。少年サムエルは目をこすりながら急いでエリのへやに行き「はい、ここにおります」とエリに言いました。

「わたしはよばない、帰ってねなさい」とエリが答えました。

サムエルは自分のへやにもどってねました。するとまた同じ声で「サムエル！」とよぶのが聞こえました。

もう一度サムエルは眠い目をこすりながらとびお

きてエリのところへ行き「あなたがおよびになりました。わたしはここにおります」と言いました。

しかしエリの答えは同じでした。「子よ、わたしはよばない。もう一度ねなさい。」

サムエルが自分のへやにもどると、また同じ声で「サムエル！」とよぶのが聞こえました。

そこでサムエルはおきあがりもう一度エリのところへ行って言いました。「あなたがおよびになりました。わたしはここにおります。」

エリは、少年サムエルをよんだのは主にちがいないと思いました。そしてサムエルにへやに帰ってねるように言い、もしもう一度よぶ声が聞こえたら、「しもべは聞きます。主よ、お話しください」と言うようにとサムエルに言いました。

そこでサムエルは自分のへやに帰ってねました。するとすぐに「サムエル！サムエル！」とまた同じ声が聞こえました。

サムエルは答えました。「しもべは聞きます。お話しください。」

その晩主はサムエルと話し、これからおこる多くのことをサムエルに話しました。

次の日の朝、サムエルは早くおきて神殿のとびらをあけました。するとエリがサムエルをよんで主が何を話されたかを聞きました。サムエルはその晩主が自分に語られたことをすべてエリに話しました。

エリは頭をさげて言いました。「どうぞ主が、良いと思うことを行なわれるように。」

こうしてサムエルは成長していきました。主はサムエルと共にいて何度もサムエルに話されました。

みんなはサムエルが主の予言者よげんしやであることを知り、サムエルは人々に深く愛されました。

(Iサムエル1～3)



「ジョージとはもういっしょに遊ばないことにしたよ」ジョニーはすっと立って言いました。

「なぜだい？」とデビッドがたずねました。

「よせよ、わかってるくせに。」ジョニーが答えました。

「わからないよ。ジョージはぼくたちと少しかわっているかもしれないけど、でもそんなことで仲間はずれするなんておかしいよ」とデビッドが言い返しました。

「かわってる？かわってるなんてもんじゃないよ。あいつはバカだよ。」

「いろいろわからないこともあるけどさ。バカなんかじゃないよ」とデビッドは大きな声で言いました。

「ぼくに言わせれば、わからないということはつまりバカだよ。」別の男の子が言いました。

11歳のデビッドはこまったようにいとこの方を見ました。ジョージのむじゃきな顔はデビッドを見てほほえみしました。そのデビッドはできることなら走って行ってどこかにかくれ、もう二度とあのえがおを見なくてすめばと思っているのでした。しかしそれはありえないことでした。

ジョージは両親をなくしたので、デビッドといっしょに住むためにはるばるデンマークからやってきたのです。デビッドはもう一度ジョニーとその仲間たちの顔を見ました。デビッドをとりかこんで、彼らはいじ悪そうに返事を待っていました。

「わかった。ジョージを家につれて行くよ」とデビッドはため息まじりに言いました。

どうしたらよいのかわからない自分自身に、そしてジョージに腹を立てながら、デビッドはいとこのうでをつかみ家へ帰ろうとしました。

「いやだ、野球。」ジョージはじっと立ったまま言いました。

「ジョージ、きみにはわからないんだよ。」デビッドはこまったように言いました。

「みんなはもうきみといっしょに遊びたくないんだって。」ジョージのえがおはきえ、何を言っているのかわからないというようにまゆをしかめました。それからまた急にえがおになりました。

「ジョージ、みんなはね、……」デビッドは説明しようと思いましたがどうせわかってももらえないと思いました。

「なんでもない。さあ、行こう。」

デビッドは今までのことをずっと考えながら早足で歩きま



ジョージのえがお

作 シェリー・ジョンソン

絵 ハワード・ポスト

した。どうしてジョージはぼくといっしょに住まなきゃならないんだろう。どうしてぼくには英語の話せるふつうのいとこがないんだろう。

まもなくふたりは家につきました。ジョージは居間^{いま}に行って遊び、デビッドは自分の部屋に入りました。そしてデビッドはベッドに体をなげだしていろいろなことを考えました。

「どこか悪いの？」洋服をかたづけにデビッドの部屋に入ってきたお母さんがたずねました。

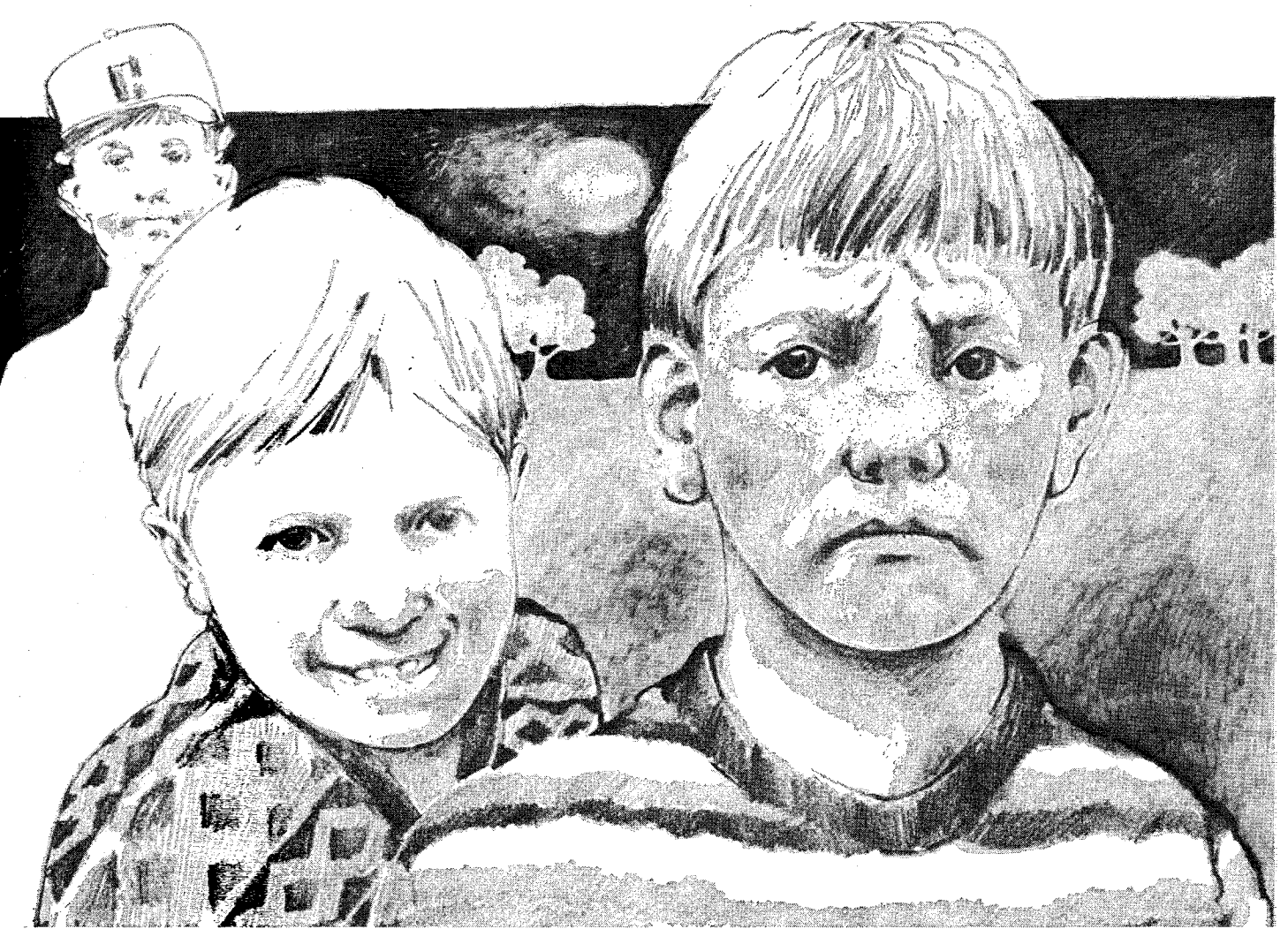
「ううん、ちょっと考えごとをしていたんだ」とデビッドは答えました。

「何か大切なことを考えているようね。お母さんにお手伝いできるかしら。」お母さんはベッドに腰をおろしながら言いました。

「わからないなあ。」デビッドはじっと天井を見つめながら言いました。「お母さん、どうしてジョージは、ああなの。」

お母さんはおどろいたように言いました。「どういうこと？」

「ほら、つまり……ジョージはかわっているだろう」とデビッドは答えました。



「かわってるって何が？背たけもあなたと同じよ。あなたの洋服を着ているぐらいですもの。ジョージはあなたと同じ物が好きよ。チョコレートやホットケーキがね。それにあなたと同じことで悲しんだり喜んだりするわ。」

「でも、お母さん、ジョージは……」デビッドは自分の言いたいことをどう言ったらいいのかわからなくなって途中でやめました。

「きょう、何かあったの？」とお母さんがたずねました。

「そうなんだ。ジョージは頭が悪いから、みんなもういっしょに遊ばないっていうんだ。」

「ジョージはとてもおことうよ。私たちと同じ言葉は話せないけど、とてもおぼえが早いわ。それはジョージはほかの人とちがうところがあるかもしれないけど、でも同じ言葉を話せなくても人の気持はわかるわよ。」

デビッドはこまったようすで言いました。「でも友だちがジョージがいるといやがるんだ。むりもないよ。こうするよと教えてもわからないんだもの。ぼくはどうすればいいの。」

「それはお母さんに聞かないで、あなたが自分で決めることよ」とお母さんが言いました。

お母さんは立ちあがりながらにっこりして言いました。「ふたつのことを覚えておいてね。ひとつはジョージはあなたのことが大好きだっていうこと。もうひとつはジョージはまだ言葉がわからないけどあなたやほかの友だちと同じように神さまの子供だっていうこと、そして天のお父さまはあなたたちと同じようにジョージをも愛しておられるということよ。」

そのときとぜんジョージが部屋に入ってきました。「きて、デビー」ジョージは息を切らして言いました。

お母さんはデビッドにウインクすると部屋を出て行きました。

「きて、デビー。」ジョージはデビッドをうながしました。「ああ、わかったよ。今行くよ。」ほんとうは行きたくなかったのですがデビッドはそう返事をしました。

ジョージはデビッドのうでをとってソファーのところにつれて行きました。そして本を開いて読みはじめました。「ヴ



エイ」ジョージはあのとくいのがおをみせて注意深く発音しました。

「ヴェイ？」デビッドが言いました。

「ヴェイ。」ジョージはますます大きなえがおをみせました。

デビッドは本を見てみました。「ウイー、それはウイーって読むんだよ。」

ジョージはがっかりしたようでしたがまたすぐえがおになりました。そして今度は「ヴィー」と言いました。

デビッドは首を横にふりました。「ちがう、ウイーだよ。」そう言ってデビッドはいとこに背を向けると自分の部屋に入ってしまった。

「なぜ、なぜ、なぜなんだ。デビッドはベッドに体をなげだして考えました。ジョージが言葉をわかりさえすれば、いっしょにいろんなことができるのに！」

デビッドがベッドに横になるとすぐ、だれかが静かにドアをノックしました。ドアがゆっくり開き、ジョージの青い目

がドアのまわりを注意深く見わたしました。

「デビー」とジョージがそっと呼びました。

デビッドは返事をしませんでした。ベッドの方へ歩いてきてすわってもデビッドはジョージの顔を見ませんでした。ジョージはゆっくり話してみました。むだでした。デビッドにはわかりませんでした。何のことかさっぱりわかりませんでした。

デビッドはジョージの顔を見ました。ジョージはぼくの言うことがわからない。だけどぼくもジョージの言うことがわからないんだ。デビッドははじめてジョージが自分のことをどう思っているだろうかと考えました。たぶんぼくもジョージの言うことがわからないからジョージはぼくをバカだと思っているかもしれない。

デビッドはもう一度ジョージを見ました。ジョージはいっしょうけんめいに何かを説明しようとしていました。そのとき、デビッドはふいにジョージが何を言いたがっているのかがわかりました。友だちになりたかったのです。ジョージはデビッドに大好きだということを言っていたのです。デビッドはデンマーク語を知らなくとも、ジョージの顔を見てそのことがわかりました。

ジョージはやっと話し終え、すわって返事を待っていました。デビッドはとてもはずかしくなりました。デビッドがほほえむとジョージもほほえみかえしてきました。ふたりは話さなくともわかったのです。

「夕ごはんよ」とお母さんのよぶ声が聞こえました。

デビッドが身ぶりで示すと、ふたりは急いで部屋を出ました。

デビッドはろうかでお母さんをおいこそうとして立ち止まりました。「お母さんぼくが悪かったんだ。わからなかったのはジョージじゃなくてぼくだったんだよ。ジョージは英語がわからないかもしれないけど、友情は通じるもの。ジョージはほんとうにすばらしい友だちだよ。」

お母さんはにっこりして言いました。「あなただってすばらしいわ。」

ジョージはもうテーブルについていました。ジョージのすばらしいえがおは「友だちになれてうれしいな」と言っているようでした。

「お母さん」デビッドは楽しそうにわらいながら言いました。「ぼく、ジョージからデンマーク語を教えてもらおうかな。」

シオンの幸せ、われらも受けん

ブリガム・ヤング大学宗教学部長

ロイ・W・ドクシー

「シオンの建設は、あらゆる時代の神の民が関心を寄せてきた大事である。それは予言者、祭司、王たちが格別の喜びをもって思いめぐらしてきた事柄である。彼らは胸をふくらませて私たちの住むこの時代を待ち望み、輝かしい喜びあふれる期待に燃えて、この私たちの時代のことを歌い、記し、予言した。しかし彼らはこの日を見ずに死んだ。私たちは、神が末日の栄光をもたらすために選びたもうた恵まれた民である。私たちは末日の栄光が世に広まるのを見、それに加わり、援助することを許されている。『時満ちたる神権時代』、神が天の万物と地上の万物を共に集めたもう時代、……あらゆる国民あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる人々の中から神の聖徒がひとつに集められるとき、予言者の語るごとくユダヤ人が集められてひとつとなり、悪人も滅ぼされるべくひとつに集められるこの時代に、神の『みたま』は残りの国々から取り去られて神の民と共にあり、天地の万物はキリストにあってひとつとなるであろう。」

ジョセフ・スミス「教会歴史記録」[英文] 第4巻P.609

—610

教義と聖約の啓示の最初から最後に至るまで、主はなぜシオンについて語っておられるのだろうか。古代の予言者は、なぜ末日のシオンのことを予言したのだろうか。また、400曲近い教会の讚美歌のほぼ15パーセントにシオンのことが歌われているのはなぜだろうか。このような疑問は、末日聖徒イエス・キリスト教会のシオンに対する関心と、とりわけシオンが重要であるとの考え、実に人の救いにとってシオンが大切であるとの考え方を示唆している。

何編かの末日聖徒の讚美歌から抜粋した次の歌詞に、シオンの使命が語られている。「主までもシオンを興したもうと予言者らは告げぬ」、「シオンに日は出づ、かげは暗くとも」、「みそらにうわしわがシオンの都」、「シオンの若者……ひるまず逃げず」、「ためらうことなく、シオンに集まれ」、「栄えあることみなシオンに歌われ」、「山に囲まれて神守るシオン」、「シオンの山の聖なる神殿」、「シオンの丘より出づる光はあまねく全地を照らし」、「シオンの幸せ、われらも受けん」*。

*注 エライザ・R・スノー「目覚めよ、わが詩人」讚美歌、188番

最初に引用した文章の中で、ジョセフ・スミスは、シオンの建設において私たちの神権時代が重要であるとの見解を明らかにしている。

聖典にあげられているシオンの意味の中で、次のものが大切である。「心の清い者」、イエス・キリストの教会、旧エルサレムと聖なる山、エノクの建てた聖なる市、南北アメリカ、アメリカに建てられるはずの新エルサレム。この定義のうちの4つは直接この神権時代に関連がある。

教義と聖約には、末日におけるシオンの姿が最も明確に説明されている。1829年4月、主はオリバー・カウドリの求めに応じて、オリバーと他の人々に、「さて汝ら今われに求めしにより、見よ、われ汝らに告ぐ、汝らわが誠命を守り、シオンの大事を起してこれを確立せんことを求めよ」と勧告された。(教義と聖約6:6)

ブリガム・ヤング大管長への、教義と聖約に記録された最後の啓示の中には、シオンとシオンの民に関する次のような主の約束が与えられている。

「シオンはわが時期至りて贖わるべし。

わが民は、すべてのことに試煉を受

けざるべからず。かくして彼らはわが与えんとして持てる光栄、すなわちシオンの光栄を受くるために準備せらる。而して、およそ懲しめを堪え忍ばざる者はわが王国に適しからず。」(教義と聖約136：18, 31)

シオンの大事を起こしてこれを確立することは、すべての末日聖徒の務めである。この業に真心をもって携わる人々は、教会すなわちシオンの建設に全身全霊を傾ける人である。その勇敢な人々にとって、次の言葉は深い意味を持つ。

「故に、誠に主かくの如く言う。シオンよ喜べ。そはこれこそシオン、すなわち『心の清き者』なればなり。この故にシオンよ喜べ。一方、すべて悪しき者は悲しまん。」(教義と聖約97：21)

イエス・キリストの贖罪によって、人は心から悔い改めれば贖われることになった。しかしまた、教会の発展に寄与するためには、主が啓示されたすべての戒めに従って生活することも必要である。(教義と聖約38：40)

ミズーリ州ジャクソン郡

主はミズーリ州での迫害を耐え抜いてしかも心の清い者は、救いを得ると

啓示された。(教義と聖約124：54) 心の清い者たちがシオンである教会のために行なったと同様に、もし私たちが必要なあらゆる物を差し出すならば、それによっても私たちの救いは保証されるのである。(教義と聖約98：13—15, 101：35—38)

シオンについての近代の啓示によれば、その中心はミズーリ州ジャクソン郡に建てられる。(教義と聖約57：1—3) 1831年の昔、予言者ジョセフ・スミスが神殿用地を奉獻したときに、命を受けて何名かの聖徒がこの地に入植した。将来そこには神殿と共に新エルサレムの町が建てられ、それにより律法はシオンから出て地を治めるといふ古代の予言が完全に成就されるであろう。(教義と聖約84：1—5, イザヤ2：2, 3, ミカ4：1, 2)

貧者が施しを受け、富者が福音の律法に従うことにより救いを得られるようにと、霊的な社会経済機構である奉獻の律法が啓示された。多くの聖徒がミズーリ州に集まったが、ミズーリ州滞在はほんの束の間であった。主はシオンの全き光栄は多くの艱難の後に来ると言っておられたからである。(教義と聖約58：3—5)

主が言われるように、誓約の民の中

のある者たちが罪を犯したため、迫害が加えられた。(教義と聖約 101：1—9) 聖徒たちはミズーリ州西部から追われ、シオンの中心地の建設は、聖徒が清い民となって再びこの地を所有できるときまで延期されることとなった。(教義と聖約105：34)

近代の啓示(教義と聖約63：27—31)に一致して、末日の予言者たちは、聖徒たちの永久のゆずりの地であるジャクソン郡についての予言はこれから成就すると断言している。ブリガム・ヤング大管長は、1856年聖徒たちの集まりでこのことを話している。

「……この民は必ずジャクソン郡に戻る。どれほど経ってからか、いつであるかはわからない。しかし今そこは聖徒の集合地ではない。」(「説教集」〔英文〕第3巻P.278)

聖徒の中の無関心で怠惰な者は、シオンの発展に力を尽くさないため、その祝福を受けないであろう。事実、主は教会員に誓約を守らない者にはこの世の諸罰が待っていると警告された。(教義と聖約97：22—28)

すべてのものは主の前に正しく歩む者によかれと働き、心の清い者として清められた状態にあるとき、シオンの光栄は彼らの上に留まるであろう。

(教義と聖約100:15-17)

心の清い者

アルマは、神の王国を受け継ぐにはだれでも必ず肉欲の状態から霊的な状態へ変化して、新たに生まれなくてはならないと言った。(モーサヤ27:25-26) バプテスマを受けた教会員は、戒めを守って清い心になるときに聖霊の力により、再び生まれ清められる。

教会員がイエス・キリストにあって「新たに生まれた者」となるには、勢力と精神と力を尽くして主を愛し、主に仕えなくてはならない。(教義と聖約20:29-34)

次に、そのための方法を幾つかあげる。

1. 主イエス・キリストの贖罪の犠牲を信じる。(教義と聖約76:41) 私たちに対する神の愛はさまざまな形で表わされるが、その最たるものは、私たちが救われた状態で永遠に神と共に住めるように、御子を罪の贖いのために送られたことである。私たちの長兄は自分から進んで命を差し出し、弟たちへの愛を示された。キリストへの私たちの愛を示す最良の方法は、その戒めを守ることである。

2. どのように生きるべきか、どの

ように礼拝すべきか、また欺きに遭わないようにするにはどうするかを知るために、教会の標準聖典から神のみ言葉を学ぶように努める。(教義と聖約43:8-10, 93:19, ジョセフ・スミス1:37) 毎日の聖典の勉強は、神のみところを知る確実な方法である。

3. 教会員として、また正しい生活をすることによって、聖霊が自分と共にあるように努力することができる。主は、私たちが欺かれないように「みたま」の賜を使うこともできると言われた。(教義と聖約46:7, 8) 神が生きておられ、イエス・キリストが私たちの救い主、神の御子であるという確信も、聖霊の賜のひとつである。

(教義と聖約46:13)

4. 毎日の生活で「みたま」の導きを求める。その鍵とも言うべきものがオリバー・カウドリへの主のみ言葉(教義と聖約9:8, 9)や、その後の予言者や指導者の教えの中に見いだされる。

5. 神に対する責任を常に心に留め、ひたすら心を神に向ける。絶えず福音のことを思っていたブリガム・ヤングは、自分が神の「みたま」と共にあったことがわかると語った。(「説教集」[英文]第12巻, P.217) 私たちがい

つも自分の交わした福音の誓約を心に留めているならば、正しい決定を下すのに非常に役に立つ。聖句のことを考えたり、救い主の行ないを思い出したり、人生の目的や忠実な者の将来を思い起こしたりすることは、皆ひたすら心を神に向ける機会となる。

6. 指定された集会への出席を含めて、教会活動に活発に参加する。(教義と聖約38:40, 75:28) 教会活動に参加しないと、福音の戒めに無関心になり、主の「みたま」の導きを失ってしまうことになる。(教義と聖約1:33)

7. 隣人に親切にして、日常生活で福音を実践する。アメリカのシオンでも、聖徒の住む地の果てでも、心の清い者の住む所がシオンである。(教義と聖約101:20-23) 家族は父親の指導の下に自分たちの家族をシオンにすることができる。教会プログラム、特に家庭の夕べのプログラムを熱心に行なえば、予言者ジョセフ・スミスの言った次の目標に従うこととなる。「私たちはシオンの建設を最大の目的とするべきである。」(「教会歴史記録」[英文]第3巻, P.390)

8. 自分の管理者を支持する。謙遜で熱心な聖徒は、指導者を支持するこ

とによってのみ、主の「みたま」を十分に享受できることを知っている。支持の挙手は、バプテスマを受けた教会員全員が指導者の言葉に従うことを表明するものである。そのような聖徒は教会には啓示のみたまが働いて男女が召されることを知っている。また、主からの啓示は大管長を通じて来ること教会の全役員は個人の召しに関して神の導きを受ける権利を持っていることを知っている。私たちは会話や祈りや訓戒やすべての行為によって、兄弟たちを強くするようにと戒められている。(教義と聖約 108:7) 実に聖徒たちがエノクの民のように「心を一にし、精神を一にし、義に」住んで幹部の兄弟たちを支持しなければ、シオンの民とはなれないであろう。(モーセ 7:18, 教義と聖約37:27)

シオンと家族

シオンの建設についてのブリガム・ヤングの言葉は、家族にも場所にもあてはまる。「私たちは自分の好むままに、シオンを築くこともできればバビロンを築くこともできる。私たちは自分の望む通りの場所を造ることができ。民はシオンを築くことができる。自分の内に天国を築くことができる。

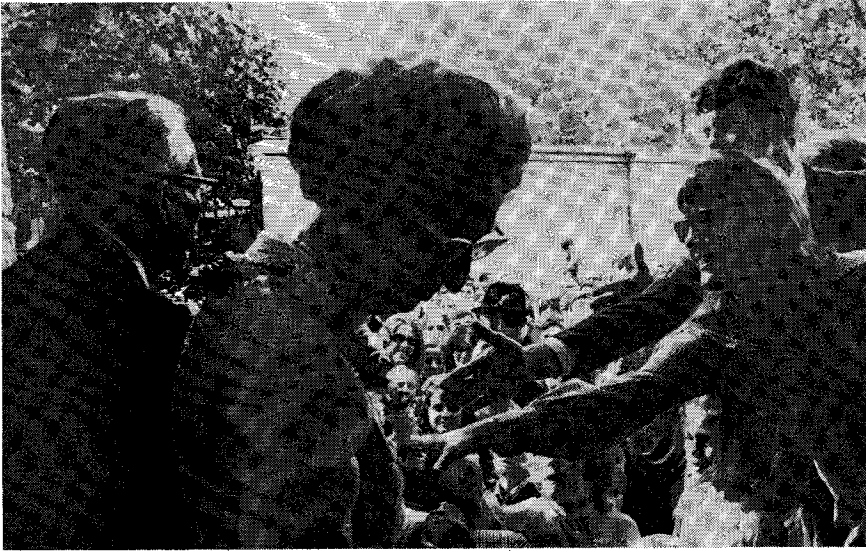
民がここに集うとき、『行く先々にシオンの精神を携え行こう。これは悪霊を制する方法である。なぜなら、私の霊は悪を制するからである』という決意を持ち、心にシオンを築こうとの決心をもって来るべきである。あなたがたは、このようにすればシオンが築かれることを知るであろう。」「(説教集〔英文〕第5巻, P.4)

予言者たちの描くシオンは今はない。しかし、神の王国は教会を通じて広まり、各個人の中に将来ひとつとなるシオンがもたらされる。従って完きシオンは主のしかるべきときに来るであろう。選ばれた人々が救い主の再降臨のときに福千年統治への先達をつとめる備えをする、その恵まれた日のために準備が続けられている。教会の指導者が新エルサレム建設のために、忠実で献身的な教会員を召すときが来るであろう。しかし、予言者が啓示を受けたときに初めて、その召しは下されるのである。(教義と聖約101:16-21, 105:13)

ある人はこの世で完きシオンを目にしないかもしれない。しかし自分や他人の内にシオンを建設する責任を引き受けた聖徒は、やがて永遠の喜びと幸福を得るであろう。心にシオンの精神

を持つ教会員は、皆予言者ジョセフ・スミスの次の言葉に大きな慰めを見いだすのである。

「この大いなる目的実現のため、天上の神権は地上の神権と結合する。そして神の王国をいで行かせるというひとつの共通の目的のために私たちは結ばれる。天の神権はただの傍観者でなく、また神の『みたま』は上から降りそそぎ、私たちの中に留まる。至高者の祝福は私たちの幕屋に宿り、私たちの名が未来の代に伝えられる。子孫は立ち上がり、私たちが祝福された者と称える。そして私たちが経験してきた数々の事柄、耐え忍んだ困苦、身をもって示した不屈の熱情、光栄と祝福の実現をもたらす業の基礎を置くときに、私たちが耐え抜いた打ち勝ち難いばかりの諸々の苦難、過去の幾世代に神と天使たちとが喜びつつ見守りたもうた業、古代の族長と予言者の魂を燃え立たせたもの、闇の力を滅ぼし、地を更新し、神の栄光をもたらし、人類家族の救いをもたらすべく予定された業を、いまだ世に生まれぬ世代の人々は格別に喜びつつ、住まう。」「(教会歴史記録〔英文〕第4巻P.610)



シオンの ステーキ部を 堅くせよ

大管長

ハロルド・B・リー

1973年4月6日という日は、特別意味深い日である。それは、この日がこの神権時代における末日聖徒イエス・キリスト教会の設立を記念する日であるということだけではなく、私たちの救い主であり、主であるイエス・キリストの生誕を祝う日でもあるからである。ジョセフ・スミスは、この同じ4月6日に与えられた啓示を次のように記録している。

「この末の代に於けるキリストの教会の起りはこれなり。而して時はわれらの主、われらの救い主なるイエス・キリストが、肉身を以てこの世に來りたまいてより千八百三十年にして第四の月すなわち四月の六日、神意と神命によりて、わが国の国法に従い正式に組織創立せられたり。」(教義と聖約20:1)

この時以来、教会の上半期総大会が毎年4月6日を含む数日間開催されることが伝統となっている。

2年後、また別の啓示が与えられた。この啓示は、当時でも重要な意味をもってはいたが、今日増加の一途を

たどる教会員たちの要求を考へてみる時、一層大きな意味をもつものである。今日、私はこの聖句を引用して、私の説教を進めたいと思う。

「すなわちシオンはその美と聖を増し、その境域は拡がりそのステーキ部は堅うせられざるべからず。われ誠に汝らに告ぐ、シオンは起ちてその美しき衣を着けざるべからずと。」(教義と聖約82:14)

この聖句に使われているシオンという言葉は、疑いなく教会のことを意味していた。当時、教会はやっと設立が終わり、これから発展しようとしている小さな団体にしかすぎなかった。しかし、やがて教会外の敵から冷酷な仕打ちを受けた教会員たちは、主が「シオンの地」として指定されたミズーリ州ジャクソン郡に集合するよう指示を受けた。

こうして数々の困難と闘っている初期の教会員たちの行く末を暗示するかのように、主は、また他の啓示で次のように言われた。

「故に、誠に主かくの如く言う。シオンよ喜べ。そはこれこそシオン、すなわち『心の清き者』なればなり。この故にシオンよ喜べ。一方、すべて悪しき者は悲しまん。」(教義と聖約97:21)

この「シオン」という名称にふさわしくなるために、教会員は、黙示者ヨハネが義人の住む聖なる都が、夫となる神の小羊のために花嫁のように着飾っているのを示現で見て記録しているように、自分自身を夫を迎えるために着飾る花嫁として考えなければならない。この黙示録の中に描かれている関係こそ、ちょうど妻が夫のために美しい衣で着飾るように、私たちが主に受け入れられる者となるため、主が私たち教会員に望んでおられる関係なのである。

主の民が、神の目から見て充分受け入れられるに値する者となって生活するための規範は、今、私が引用した聖句の中に示されている。教会員は、世の人々の前にその美を増し、内面的な

麗しさを堅持しなければならない。世の人々は、その麗しさが神聖さに反映し、その神聖さから生ずる固有の性質に反映するものであることを知るであろう。義人と心の清い者が住むシオンは、今その境域を拡げ始めなければならない。シオンのステーキ部は、堅く強められなければならない。これは皆、シオンが全世界の人々に救いの計画を推し進めるにあたって、ますます勤勉になることによって輝きを増し、立つためである。

まだ教会がその揺籃期にあるとき、主が教会員はひとつとなるようにと言われたため、人々はひとつ所に集合しようとした。主は、このとき、いずれ初期の集合地には、こうした人々に見合うだけの土地がなくなる時が来るであろうと告げられた。次のような主の御言葉がある。

「わが教会は、末の世に於て須らく末日聖徒イエス・キリスト教会と称えらるべし。」さらに次の戒めが続く。「汝ら起ちて己が光を輝かせ。これ汝らの光よるずの国民のはたじるしとならんため……。」(教義と聖約115:4, 5)

ここで明確に推論できることは、この時代における主の教会の出現は、次のような古代の予言の成就の始まりであるということである。

「主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべて国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。……」(イザヤ2:2, 3)

こうした一連の啓示の中で、主はステーキ部と呼ばれる教会の組織単位について語っておられる。それは私たちが信仰を同じくしない人々の間では、

ちょうど司教管区とでも考えられているものである。この単位は、次にあげられるような根本的な目的のために、組織されたものである。その第一の目的は、見えるもの、見えざるものを問わず、主の御業を妨げる敵に対する防衛である。

使徒パウロは、私たちに影響を及ぼす敵について、次のように語っている。

「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。」(エペソ6:12)

これらの組織は、「暴風雨の避所となり、憤りのありのままに全地に注がる時に一つの避所ともならんため」(教義と聖約115:6)に存在すると前述の啓示中に述べられている。

この神権時代に入って以来ずっと与えられた一連の主の啓示の前書きの中で、主は、次のような重大な警告を与えられた。私たちはこの警告を片時も忘れてはならない。1831年に与えられたこの予言的な警告の目的は、主の御言葉より明らかである。

「すべての人々をしてその日の速に來るを知らしめんとせばなり。而して地より平和の取り去られ、悪魔自らの領土を支配する時はなおいまだしといえども今や近きにあり。」(教義と聖約1:35)

この警告が与えられてから142年経た今、私たちは、確かに現在の荒廃ぶりを目撃している。現代は、サタンが自らの領土を支配している時である。このサタンは、救い主がこの地上におられたとき、「この世の君」とも「あらゆる義の敵」とも言われたほどの、強大な力を持っている。

今日、今述べたような恐ろしい予言やその予言の成就の証拠が歴然としてはいるが、その同じ啓示の中で、主の

御業を破壊するサタンの計画を打ち砕くために、さらに偉大な力のあることが約束されている。主はいと高き神の聖徒たち、すなわち主が「シオンの民」と呼ばれた心の義しい人たちとこの約束を交わしておられる。次の聖句は主の御言葉である。

「されど主もまたその聖徒らを支配し、その真中にありてこれを統治せん。而してイツミヤ、すなわちこの世に下る審判のために天より降り來らん。」(教義と聖約1:36)

この聖句は、主が弟子たちに、この世的なことを警戒するよう言われたときの言葉と同様な意味で述べられたものである。主は弟子たちに、世にあって世にある罪からは身を守らなければならないと教えられた。

天地創造以来、今日ほど、主がその御業を破壊しようとする悪魔の支配を許しておられ、また義の業の完全な崩壊を救おうとしている義人の中にあっても、御自分の力を現わそうとされないときはないと思う。

今日、私たちは次のような主の約束を目の当りにしている。それは、「もし汝ら誠心誠意わが光榮を顕さんとすれば」、主が予言者モーセに言われたように、「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらず」という約束であり、さらに「汝らの全身光明に充たされて汝らの中に暗黒なく、その光明に充ちたる体はすべての事を理解せん」(教義と聖約88:67)という約束である。

また次のような主の約束も与えられている。「見よ、みよ、われ汝らの羊群を護り、長老たちを起して彼らに遣わさん。見よわれその時期に於けるわが業を急ぐべし。」(教義と聖約88:72, 73)

今日私たちは、主の聖徒たち、すなわち教会の会員たちの間にあって、主の御手の働きを目撃している。この神

権時代において、いや恐らくは、今だかつてどの時代においても、今日この教会の会員の間に感じられるほどの緊迫感が感じられたことはなかったであろう。教会の境域は現在拡がりつつあり、そのステーク部も堅くされつつある。教会の設立後間もなく、聖徒たちの集合する特別の場所に関する啓示が与えられ、主はこの集合地が変更されることはないと言われた。だがそのとき同時に、次のような条件もつけられた。

「されど、ついに聖徒を容るる余地なき日來らば、その時はわれ彼らに指定すべき他の場所あり、而してこれらの地はシオンのあげ幕またはシオンの力となるためにステーク部と呼ばれん。」(教義と聖約101:21)

昨年8月のメキシコシナー地区総大会において、十二使徒評議員会のブルース・R・マッコンキー長老は、示唆に富んだ説教の中でこの主題に関する若干の論評を述べている。私は、そのマッコンキー長老の説教の中から少し引用したいと思う。

「この栄光に満ちた回復と集合の時代について、ひとりのニーファイ人預言者は次のように言った。『主の誓約……とは主がイスラエルの全家と結びたもうたものであり、また……ユダヤ人が神の真の教会と羊の群に再び復され、その受け嗣ぎの地に帰して集められそのすべての約束の地に住む日がくる。』(Ⅱニーファイ9:1, 2)

私はここで、この聖句に述べられている事柄に注目していただきたいと思う。すなわち、イスラエルの集合とは、真の教会に加入し、真の神と救いの真理を知るようになることであり、あらゆる国々、あらゆる人々の中において聖徒たちの会衆と共に神を礼拝することである。この啓示された御言葉は、主の羊の群、受け嗣ぎの地に集められ

るイスラエル、そのすべての約束の地に打ち立てられるイスラエル、かつまた、主の再降臨の折、あらゆる国語を話すあらゆる国々に、あらゆる人々の中に、主の誓約の民である会衆がいるということに注意していただきたい。」

さらにマッコンキー長老は、この説教の結びに、教会をそれぞれの国々で打ち立てるために、地方の指導者を教育し、訓練することが大いに必要であると、声を大にして述べていた。

「メキシコの聖徒のための集合の地はメキシコにあり、グアテマラの聖徒のための集合地はグアテマラにある。またブラジルの聖徒のための集合の地はブラジルにあり、これが同じ意味で全世界の規模にまでひろがる。日本は日本の聖徒のためにあり、韓国は韓国の聖徒のためにある。またオーストラリアはオーストラリアの聖徒のためにあり、あらゆる国々は、その国の民のための集合の地である。」

次のような質問が非常に度々発せられる。「他の数多くの教会が退廃の一途をたどっている今日、この教会が驚くべき発展をとげているのはどうしたことなのか。」

教会が日々発展を続けていることを説明できるような要素、要因は数多くあるが、私は、ここではほんの少しだけ例をあげて、こうした質問をする人々の一考に付したいと思う。

この教会が「ユタの教会」であるとか、「アメリカの教会」であるとか考える人はもはやいない。教会員は、今日全地に満ちて、その数は78カ国に及び、現在17カ国語で福音が教えられている。

今日、私たちが直面している最大の問題は、この異常なほど膨張を続ける教会員をどうするか、ということである。無論、教会のこのように広範な発

展を私たちは心から喜ぶものではあるが、この発展は同時に、数多くの問題に対して、教会の指導が後手にまわらないようにするための数々の大きなチャレンジをはらんでいるとも言える。

こうした状況に対応するための計画を立てるにあたって教会の指導者たちは、常にふたつの根本的な原則に導かれている。最初に人の注意をひき関心を持たせると思われるのは、世の創造の前から定められた救いの計画という根本的な原則である。これは全人類の贖いのためであり、この神権時代の預言者たちに折りに触れて啓示されている事柄であり、決して変わることはないものである。かつて使徒パウロが宣言したように、今日私たちが次のように言おう。

「しかし、たといわたしたちであろうと、天からの御使であろうと、わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その人はのろわるべきである。

兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言うておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。

わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。」(ガラテヤ1:8, 11, 12)

なぜ教会が着実に発展しているのかを尋ねる人々に答えようとするならば第一の根本的な理由は、私たちは教会の根本的な教義を教えるにあたって首尾一貫してきたからである、と答えることができよう。私たちの信仰箇条でも次のように言っている。

「われらは、すべて神のこれまでに啓示したまいしこと、すべて今啓示したもうことを信じ、なお今より後、神の王国につきて多くの偉大にして重要なことを啓示したもうことを信ず。(これに「教う」と加えてもよいだろ

良い地に落ちたが、良い地に落ちた種の中でも、あるものは30倍に、あるものは60倍に、あるものは90倍に実を結んだ、という部分がある。今日でも、同じ意味で、やや活発な会員もいればそれより少し活発な会員もいる。また教会の活動に、完全に活発な会員もいる。だが、私たちは、道を踏みはずした人々に常に援助の手を差し伸べているし、そのような人々を再び活発にするため、日夜努力しているのである。

しかし、恐らく、教会の進展する最も重要な理由は、この神聖な御業に対する個人個人の証であろう。そして、この証は、教会員の心の中で加速度的に強まっていくものなのである。つまり、教会の強さは、教会員の数でもなければ、忠実な会員たちの納める什分の一や献金の金額によるのでもない、礼拝堂や神殿の大きさによるのでもない。ただ、忠実な教会員たちの心の中に、これが確かに地上における神の教会であり、王国であるという揺るぎない確信があることなのである。もしこの確信がなかったなら、私の知っているある有能な実業家が言ったように、「教会の福祉計画は、単なる混乱に陥ってしまうであろう。同様に、宣教師活動も実を結ぶことがなく、教会員も教会の数多くの事業を財政的に支えるために、今ほど忠実には、多大の貢献をすることもなくなるであろう。この教会の強さの秘密は、ある州立大学の学生自治会の会長をしている学生の手紙の中に読み取ることができるように思える。この学生の行状は、無論、信頼に足るものであり、次の文は彼から私にあてた個人的な手紙の中から抜粋したものである。

「国中を風靡しつつある急進的な思想の所産として、家族のきずなというものが知識階級の間で軽蔑的になり崩壊の危機にひんしています。この国

は、見たところ、性教育、墮胎、産児制限、ポルノ、ウーマンリブ、同棲、婚前交渉、婚外交渉などの諸問題の総攻撃を受けています。……」

それから、この若い学生指導者は、手紙の結びに、次のような心暖まる言葉を書いてくれた。私はこれが、彼の心の奥底から出たものであることを知っている。次のように書いてくれたのである。

「リー大管長、大管長に知っておいていただきたいことは、この大学に籍を置く末日聖徒の学生で、戒めを守っている者は皆、大管長を完全に支持しているということです。私たちは、何ものにも換えられない大切な結びつきである家族というものを滅ぼそうとしている悪魔に対し、固く立って、果敢に戦いを挑んでいる立派な指導者がいる、ということに神に感謝しています。また、大管長が、この種々交錯する世の中であって生き抜こうとする私たち青年にとって、充分理解できる方であり、また心から従っていける方であることに感謝しています。」

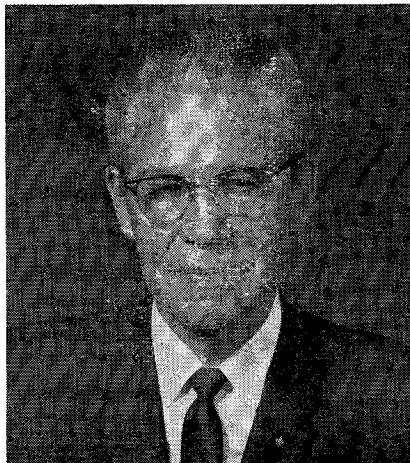
さらに、この立派な大学生の言葉を借りて申し上げるが、私も、この教会の強さを生み出している根本的な理由のうち最大のものは、神の戒めを守っている人々が、この教会の指導者を完全に支持していることである、と確信している。また、こうした全会員の一致した支持がなければ、この教会でも時代の様々な問題に対処しつつ前進することなど不可能であるということが容易に理解できるであろう。私たちの念願は、教会の全会員がこぞって神の戒めを守ることであり、世界の安全もひとえにこれにかかっている。神の戒めを守る人は、教会の指導者たちの教えに従って義の道を歩むよう説かれていだけではなく、その人個人の行動のために、主の「みたま」の導きを受

けることができるのである。教会員は皆、バプテスマを受けたとき、ある神聖な儀式をも受けたはずであるが、これは、神権の権能によってすべてバプテスマを受けた会員に施されるものである。こうして与えられたものは、主が言われたように、すべてのことを教え、すべてのことを思い起こさせ、さらには来たるべきことまでも示す聖霊の賜なのである。(ヨハネ14:26参照)

これまでのことからはっきりと理解できることは、教会の指導者、教師たちの偉大な責任が、神を信じさせまい、教会の指導者の言葉に従わせまいとする邪悪な者の手中にひとりでも落ちるのを防ぐため、全能の神の戒めに従って生活するよう説き、教え、正しく導くことにある、ということである。

私はこの業が神の御業であることを知っているがゆえに、この業が必ず勝利を収めることを心から証申し上げたい。教会内外において、陰險な手段を用いて教会を毒したり、あらを捜したり、教会の影響をみくびったりすることに憂き身をやつす敵もいるが、この教会は最後まで耐え忍び、時の試練に耐え抜き、主の御業を阻もうとする人間のあらゆる奮闘と試みが水泡に帰するとき、その手中に勝利を収めるであろう。私は、主イエス・キリストが、この教会の頭におられることを知っている。また主が、教会の高い地位にいる指導者とだけではなく、神の戒めを守るあらゆる会員たちと、主のみ御存知の働きを通し、日々、交わっておられることを知っている。私はこのことを心から証申し上げ、教会のあらゆる忠実な人々に、また所を問わず忠実な人々には皆、私の祝福を残す次第であり、アーメン。

食うと食わざる とは汝に任す



第一副管長

N・エルドン・タナー

神が人類に与えた最大の賜物のひとつは、選択の自由である。

人生行路をさほど遠くまで進まないうちに分かれ道にさしかかり、そこにある2本の大きな道のどちらを進むのか選択しなければならぬ時期がある。1本は正義の道で、進歩と幸福へ通じるものであり、もう1本は邪悪の道で退廃と悲痛に通じるものである。ここに、人間として生を受けた者が皆、自らの選びによって自分の行く末を決定してゆく、という永遠の法則が存在するのである。成功も失敗も、平安も不満も、幸福も悲痛も皆、私たちの日々の選択にかかっている。

聖典によれば、個人に関する最初のまた最も重要な問いかけは、選択の自由に関するものであった。この世の始まる前、父なる神は天上の大会議において、この地球を組織し人を住まわせるための計画を提示された。

天父の説明によれば、天父の霊の子供たちは地球に降って行き、骨肉の体を得、あらゆることに試練を受け、戒

めをすべて守るかどうかが試され、天父の御許に帰る備えをすることになっていた。

黎明の子ルシフェルは、ひとりも失うことなく強制的に全人類を贖う計画を提示し、それによって名誉を求めた。また、キリストも計画を提示した。この計画は、天父のみこころに従い、すべての人に自ら選択することを認め、その栄光を天父に帰す、というものであった。そしてキリストの計画が受け入れられた。現在、骨肉の体をもってこの地球に來ている人は皆、この大会議においてイエス・キリストに従うことを選んだのである。サタンは、これに背き、天軍の3分の1を動かして自らに従う者とした。

モーセの書の中に記録されているように、神は次のように言われた。

「これを以てそのサタンわれに叛きて、われ主なる神のすでに人に与えたる人の自由意志を滅ぼさんとなし、しかもまたわが持てる権能を自らに与うべきことを求めたるにより、われわが生みたる独子の権能によりて彼を投げ落さしめたり。

而して彼はサタンと成れり、実にあらゆる偽りの父なる悪魔となりて人を欺きだまし、以てわが声に聴き従わぬすべての者を欲するままに虜となすなり。」(モーセ4：3、4)

この時、サタンはその追従者と共に私たちの自由意志と大義とを滅ぼそうと画策した。サタンは、エデンの園においてその邪悪な業を開始し、首尾よくアダムとイヴを誘惑し、禁断の実を食べさせることに成功した。

神は次のように言いわたしておられたのである。

「この園のすべての樹よりは汝の意のままに食うことを許さる。

されど善悪を知るの樹よりは汝食うべからず。然はあれども、食うと食わざるとは汝に任す、そは汝に与えられたればなり。……」(モーセ3：16、

17)

サタンは私たちを滅ぼそうと画策しているが、一方、救い主も次のように言っておられる。「……これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1：39)

救い主は、全人類が不死不滅を享受できるように、その生命をささげられた。また救い主の福音と古今の予言者の教えを通じて、私たちは人生の目的をはっきりと理解し、善悪の区別の仕方を知っており、また戒めを守る者にはすべて、救いと昇栄が約束されている。だが、サタンも人類を滅ぼそうと画策し、次のようなことを成し遂げようと絶えず働いていることを忘れてはならない。聖典には、次のようにある。

「サタンは人々を煽て上げかくてかれらを亡びに導かんとす。

而して、かくの如くサタンは一つの奸計を企てて神の業を破らんと考うるなり。……

かくの如く、サタンはこの世をこなたかなたにさまよい歩きて人々の身も霊も亡ぼさんとす。」(教義と聖約10：22, 23, 27)

サタンの実在とその力と影響の大きさは、エデンの園での最初の誘惑以来、火を見るよりも明らかである。サタンはカインをそそのかし、弟アベルを殺させた。この殺人は非常に苦悩と悲しみを引き起こした。またモルモン経は、個人にせよ団体にせよ、主の教えに従うことを拒み、サタンの力に屈服した人々がたどった破滅の事例で満ちあふれている。

聖書の中にも、大洪水の物語がある。当時、民の罪悪のため、ノアとノアの家族を除いて、ひとりとして助かる者がなかった。

さらに、民がサタンに従うことを選んだために起こった、ソドムとゴモラの大都市の悲劇を知っている。世の歴史でも、ローマ帝国の滅亡の話がある

救い主は言っておられる。「……これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ 1 : 39)

し、主に背を向けることを選んだ諸文明、諸都市、個人の破滅の例は枚挙にいとまがないほどである。

最近、「アメリカの精神を荒廃させている者はだれか」という意欲的な講演が行なわれたが、その講演で、ジェンキン・ロイド・ジョーンズ氏は、歴史という道には、絶命した国家と滅亡した帝国の骨が散らばっている、と語った。彼の指摘によれば、ローマはその城壁が低かったために滅びたのではなく、ローマ自体が低かったために滅びたのである。官能と遊興にふけたため、一度鍛え上げられた民の性格が次第に弱められ、ローマを退廃に導いたのである。(アメリカ新聞論説者協会において行なわれた講演)

これだけ多くの事例をあげておけば義の道を選ばずに悪の道を選んだとき私たちは自由を失い、また私たちを破滅に陥れ、義人に与えられる祝福を奪おうとする者の奴隷になるということとをさらに確信させるような証拠をこれ以上あげる必要はないだろう。日々選択をするとき、私たちは、自分がまくものを刈り取るということを心に留めておかなければならない。私たちは、悪の種をまきながら祝福の実を取り入れることはできないのである。ここでひとつ物語をしよう。

社会的にかなり成功しているひとりの人がおり、彼の前途は洋々たるものであった。しかしある日、実業家たちの昼食会の席上、彼は公の場で酒を飲めば、もっと有名になり、成功もするだろうと考えた。間もなく、彼は飲酒の時間を心待ちにするようになったが彼の仲間は以前ほど顔を見せなくなった。ついに彼はアルコール中毒になり

仕事を失い、妻を失い、友を失った。いざ決断のときに、誤った選択をしたため、かつては意気揚々としかも熱心に実現をはかっていたものをすべて失ってしまったのである。

他方、私たちは、エジプトに売られたヨセフの模範があり、イスラエルの民を捕われの身から導き出したモーセの模範がある。また主から驚くべき予言を許され、ししの穴から連れ出されたとき、「……その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである」(ダニエル 6 : 23)と言われたダニエルの模範がある。この人々も、他の人々同様、誘惑に対し断固抗する勇気を持ち義を選ぶ勇気を持っていたのであり、それによって、自らとその民を破滅から救ったのである。

自己鍛練こそ、私たちが適正な選択を行なっていく上で、必要欠くべからざるものである。こぐことよりも漂うことの方が、登ることよりも滑り降りることの方がずっと容易ではある。サタンは、私たちの道筋のそこかしこにアルコール、タバコ、麻薬、ポルノ、虚偽、不正直、そして甘言といった形で誘惑をまき散らし、何としても私たちを悪事に走らせようと絶えず待ちかまえているのである。

私たちは、今日の世界にこれほどまでにはびこり、私たちを取り巻いている悪に、いかに對抗することができるであろうか。サタンは、以前にも増して、人々の身も霊も自分の支配下におこうとして躍起になっている。だが私たちは、イエス・キリストの教えに従うことを選び、私たちの影響力を活動的で積極的な力にすることによっての

み、サタンの計画を妨げることができないし、またそうしなければならない。指導者として、両親として、教師として、また隣人として、あらゆる所に住む善良な人々で、自由と平和と成功と幸福とを希求し、そして私たちの天父の御許で永遠の生命を享受したいと願う人は皆、私たちを脅かし、私たちと子供たちの安寧を危うくしているこれらの諸勢力に対抗するため、模範と勧告により、熱心に働かなければならない。抑制と因襲は子供の精神を損っているという声が、今日世界中にあるがこうした主張に翻弄されたり、惑わされたりしてはならない。抑制も何もない自由奔放な社会では、不品行に対し何の訓練も受けない子供たちが育つことになるであろう。こうした考えは誤っているし、私たちは、次のような主の勧告にもっとしっかりと耳を傾ければよいのである。

「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。」

また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えるべからず。」(教義と聖約 68 : 25, 28)

子供というものは、善悪の区別の方法を自分で学ぶものではない。両親の方で、子供たちが責任を受ける準備ができていのかどうか、また子供たちが正しい判断を下し、選択すべき2本の道と、その選択した結果とを正しく評価する能力がついたかどうかを決定し

だが、サタンも人類を滅ぼそうと画策し、次のようなことを成し遂げようと絶えず働いていることを忘れてはならない。

なければならない。私たちが子供たちを教えるとき、私たちには、子供たちを訓練する責任があるし、子供たちが正しい行ないをしていることを見極める責任がある。しかし、もし子供が泥で汚れている場合は、子供が成長して自分で風呂に入るべきかどうかを決定できるようになるまで待つ必要は全くない。また病気のときには、自分で薬を服用すべきかどうか決断を下すことができるようになるまで待つ必要もない。同じことが、学校へ行くことにも教会に出席することにも言えるのである。模範と説得と愛によって、私たちは、子供のしていることが、その子にとって最善と考えられるようにしなければならない。模範の重要さについては、強調しすぎるということはありえない。故J・エドガー・フーバー氏（前FBI長官）は、もし両親が子供たちを連れて日曜学校や教会に規則正しく出席するなら、青少年犯罪の原因を作っている勢力に対し大きな打撃を加えることができるであろう、と言った。

両親はまた、子供たちの幼ないうちに、子供たちが神の霊の子供であるという輝かしい概念とその事実を教える義務があり、イエス・キリストの教えに従うことを選ぶ道こそが、現世においても、来世の永遠の生活においても成功と幸福を享受できる唯一の道であるということを教える義務がある。またサタンが実在し、あらゆる力をふんだんに駆使して子供たちを悪に走らせようと誘惑し、子供たちを背教に導こうとし、サタンのとりこにしようとし、また、サタンに従わなかったなら必ず享受できるはずの至高の幸福と昇栄と

を取り去ってしまおうと懸命になっているということをも教えなければならない。

今日、私たちそれぞれの地域社会が直面している重大問題に対処するためには、私たち自身が、徳と義の模範を示さなければならない。また私たちの脅威的となっている道德問題に関し私たちの立場を明確にするようにしなければならない。私たちは、高い靈的水準を維持していくことができずに、動物的本能に支配されるがままの水準にまで身を落としてしまったからなどという馬鹿げた理由で私たちの文明を滅ぼしたり、墮落させたりはしたくない。

ジェンキン・ロイド・ジョーンズ氏の言葉をもう一度引用しよう。彼は、私たちが現在、道德標準の崩壊と義憤の能力の鈍化というふたつの危機にひんしている、と指摘している。

「今日の映画が、いまだかつてなかったほど退廃的であるということをご否定できる人がいるだろうか。しかし、今日では『退廃的』とは言わない。『リアリズム』という名称で正当化しているのだ。なぜ私たちは馬鹿にされるがままになっているのか。わいせつと言っても、単に芸術の大胆な表現にほかならず、そういった放蕩ぶりを描くことは、実際には社会批判なんです。よ、などと言われて、なぜいかにもわかったような顔をして黙ってうなずいているのか。……

私たちは、現在ないがしろにされている寛容の原理を再検討する時期に来ている。この寛容の原理を、自由の原理と混同してはならない。……

故意に悪事を犯せば、旧来通り、何

らごまかしのきかない罪に問われる、という概念が今でも残っているということをご示すときである。自己鍛練ということをご、今再び、今日の風潮としなければならないときである。」

それと同時に、こういった悪い風潮はみな、サタンが人類を滅ぼそうとして企てていることであるということをご認識するときでもある。書店の店頭でテレビに、ラジオに、あるいは娯楽の場に、ポルノやわいせつ物が見られるなら、また経験の浅い青少年に容易にアルコール類を売ってしまい、それに伴う飲酒運転、交通事故、家庭の崩壊などの諸悪を助長するような人々がいるなら、また、神の戒めを無視してはばからないような法律の横行に脅かされているのなら、一致団結して声をあげ、私たち自身と私たちの地域社会をそのような悪の侵略から守ることは、個人としての私たちの義務であり、責任である。私たちの地域社会で、道德と子供たちの生命そのものまでをも脅かしている不道德と邪悪にに対抗することは、私たちにとって極めて重要なことである。

自分の権利を主張し、不義な目的を遂げるために、いわゆる自由意志を行使したがっている人々は、自由意志の意味を悪用し、他の人々の権利をも奪っているのである。私たちの直面している問題の多くは、故意に、利己的で非道な利益を図っている人々によって引き起こされているが、一方、他の問題の原因をつくっている騒々しい、迷える人々も少数ながらいる。私たちの方でも同じように、私たちの環境の保全のために、声を大にしてしっかりと私たちの努力を推し進めなければならない

それであるから、人はみな現世に於て自由であり、およそ人間のためになるものは何でも与えられる。……（Ⅱニーファイ2：27）

ない。こうした状況でこそ、私たちは家族の強い結束を享受できるのでありその結束こそが国の強さなのである。世界各地でまるで申し合わせたかのように家族のきずなを破滅しようという動きが見られるが、私たちはこれに断固として反対しなければならない。

今日の世界に顕著な、戦争、死、災害、貧困、疫病などの恐ろしい状況について熟慮するとき、なぜ神は私たちがかように騒然たる状況に悩むのを黙って見ておられるのかという質問がたびたび発せられるが、人自身にその責任があることを忘れてはならない。たとえ無垢な者が邪悪な者に悩む状態が多く見受けられようとも、今日国内に広くはびこっているあらゆる闘争、論争、邪悪な原因は、人がイエス・キリストの教えに従って生活することを受け入れず、サタンに従うことを選んだことにあるのである。時の始まり以来、私たちのために与えられた神の御計画に従って進歩するためには、あらゆることに反対のものがなければならぬことを教えられてきている。再び聖典の言葉に目を向けてみよう。

「それは、すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。……もしも物事にその反対のものがなければ、正義も不正も聖潔も憐むべき様も善も悪も生ずることができぬ。……

それであるから、主なる神は随意に行う自由を人間に許したもうた。しかし人間はもしもあれに誘われこれに誘われなければ、随意に選ぶ行はできないのである。

それであるから、人はみな現世に於

て自由であり、およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか、または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから、その束縛と力とに由って定まる束縛と死とを選ぶか、これは全く人間の自由である。」（Ⅱニーファイ2：11, 16, 27）

人類はみじめになるために創造されたのではない。「人類が現世に在るのは幸福を得んため」（Ⅱニーファイ2：35）だからである。神は、私たちが選択する上で、私たちを助け、導くために、またサタンの力に対抗するために、私たちが求めている喜びと幸福を私たちに与えるために、御子イエス・キリストを通じてこの末の世に完全な福音を有する神の教会、すなわち神の王国を地上に再び打ち建てられることをよしとされたのである。神は神の御名によって働く機能である神権を回復され、私たちを導くために、神の代弁者となって働く予言者を召された。私は、数百万の聖徒と共に、福音のみが、理解の及ばぬほどの幸福と平安へ導いてくれる唯一真実の道であり、また福音を受け入れて戒めを守るすべての人にとって、永遠の生命への道となることを世界中の人々に証したいと思う。

確かに日々の生活において、私たちは、良い実を刈り入れるか、悪い実を刈り入れるか、救いを選ぶか、破壊を選ぶか、私たちの天父と共に住むことのできる永遠の生命をとるか、天父の御許から投げ落とされて絶望の淵に沈むか、といった決断にせまられてい

る。また毎日、永遠の父なる神とその御子イエス・キリストの存在を信ずるかどうか、またその教えを受け入れ、戒めを守るかどうか、ということを決断するのである。

ハロルド・B・リー大管長が確かに主の代弁者であり、今日この地上における神の子供たちの指導者であるという確固たる証を持ちつつも、彼を神の予言者として受け入れるかどうか、彼の声に耳を傾けるかどうか、彼に従っていくかどうか、私たちは毎日決断を下すのである。さらに喜んで信仰箇条に従って生活し、正直で、真実で、貞潔で、優しく、高潔で、誉れ高く、同胞との取り引きに公正で、しかも同胞に良き隣人として愛を示すかどうかについても決断を下すのである。まず神の国と神の義とを求めらることを選んだら、私たちのためになる他のものはすべて添えて与えられることを知ることができるに違いない。

予言者の声に耳を傾け、その言葉に従ったら、私たちは決して道を踏みはずすことはない。また、そうしているときには、私たちは真理と義の道に導かれており、また私たちの同胞の愛と尊敬と信頼とを勝ち得ることができ、ついには、天の御父の御許で永遠の生命を享受することができるのである。そうでないとすれば、私たちは、このあらゆる偉大な祝福を拒み、失うことになるのである。

「然はあれども、食うと食わざるとは汝に任す。」

私たちが賢明に選ぶことができるよう、イエス・キリストの御名により心から祈るものである。アーメン。

人—神の子

人が神の子であるという知識は私たちが持ちうる知識の中で、最も重要なものである。このような知識は靈感を受けない者にとっては、何ら理解できるものではない。



第二副管長

マリオン・G・ロムニー

私が力説したいと思っている真理は、死すべき体を持つ私たちが、実際、文字通り神の子である；ということである。もし人がこの真理を理解し、信じ、受け入れ、そして、それに従って生活するなら、私たちの枯渇寸前の社会はいやさされ、改革されるであろう。さらに人もまた、この現世において平安を得、来世においては永遠の喜びを得るであろう。

末日聖徒イエス・キリスト教会の会員はこの概念を、当教会の神学における根本教義として受け入れている。この概念の意味するところを充分認識したいと考えている人々は、この概念に従って自分の生活を律している。また、この概念は、教会員のあ

らゆる思想や行動に意義と方向づけを与えるものである。これは皆、教会員が、動植物の世界でも、人間の世界でも、子孫が繁殖すれば、その成長の暁には親と同形になるという普遍的な自然の法則が存在することを知っているからである。

教会員は、このことから、全く同じ法則が神の子に関しても成立することを正しく論証している。それゆえ、教会員の目標はいつの日か天の父母のようになることである。

教会員はこれを論証するだけではない。神が、人に永遠の生命をもたらすのは神の業であり、神の栄光である(モーセ1:39)ということを示されたために、教会員はいつかそうなれることを知っているのである。この永遠の生命こそ、神が現在持ちたもう生命である。

最初の人であるアダムは、自分が神の子であることを知っていた。アダムは、墮落の前には、エデンの園で神と共に歩き、神と共に話していた。墮落の後、「アダムとその妻イヴの御名を呼びたるに、エデンの園を指して行く途のかなたより声聞えて彼らに語りたまえる……。」(モーセ5:4, 5)

その後、主はふたりに福音の計画を教えるためひとりの天使を遣わされた。そこで「アダムとイヴとは神の御名を讃め、息子娘らにすべての事を知らしめたり。」すると「サタン彼らの中に来りて言いけるは、…アダムとイヴの言を信ずるなかれ、と。されば、彼らアダムとイヴの言を信ずることなくサタンを神よりも愛でたり。人はその時より、肉体、肉欲、悪魔に従う者となり始めたり。」(モーセ5:12, 13)

そのとき以来今日に至るまで、大部分の人々は、アダムの子孫の最初の世代のように、「アダムとイヴの言を信ずること」がなくなってしまった。しかし神は、アダムからノアに至るまで、あらゆる予言者たちに御言葉を繰り返し啓示しておられる。また同様にアブラハムにも啓示され、またモーセが、「いと高き山の中に捉えられ行きし」ときにも啓示された。

「モーセ神と顔を合せて相見、神と相語りける……。

神、モーセに語りて言いたまえり。見よわれは全能の主なる神……なり。……

見よ、汝はわが子なり。

わが子モーセよ、われ汝に為さしむる一つの業あり。而して汝はわが生みたる独子の生写しなり、わが生みたる独子は今も将来も救い主とならん。そは彼は恩恵と真理に充てる者なればなり。……

さて見よ、わが子モーセよ。われこの一事を汝に示す。そは汝この世に在れば、今やわれ汝にそれを示すなり。」(モーセ1:1-4, 6, 7)

この短い聖句の中で、主は3度までモーセを「わが子」と呼んでおられる。

パウロも、アレオパゴスの評議所での偉大な説教の中で、神について次のように語った。「われわれは神のうちに生き、動き存在している……。われわれは……その子孫である。」(使徒17:28)

ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリは「主は実に生きたもう」と高らかに宣言した。

「われらは、彼……を見たり。また……証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約16:22-24)

「神より生れたる息子と娘」とある。私たち皆が、肉親の父から生まれた息子と娘であると知っている今、この聖句は、在来の知識に照らしてみると、真実であると言えるだろうか。確かに真実である。人間というものが、骨肉の体で包まれた霊を持つ二元的な存在であるため、この聖句は真実なのである。啓示には次のようにある。

「人間は霊と体とより成る。」(教義と聖約88:15) 人の肉親の父が人の死すべき体の父であると同じように、神は人の霊の父である。

霊の性質は聖典の中に明確に啓示されている。モルモン経イテル書第3章には、霊についての克明な描写が記録されている。特にこの箇所は、霊体としてのイエス・キリストの現われの記録であり、この出来事は、イエス・キリストが肉の身でマリヤの

もとに生まれる、およそ2,200年前のことである。記録によれば、イエスは、人の姿かたちをしてジェレドの兄弟の前に立ち、次のように言われた、とある。

「見よ、……われはイエス・キリストなり。……」

……汝らがわが形にかたどりて造られたることを今汝は見ずや。最初に一切の人々はわが形にかたどりて造られたり。

見よ、今汝が見るこの体は、わが霊体なり。われはわが霊の体にかたどりて造れり。われは今わが霊のまま汝に現わると同じ形の肉体を具えてわが民にもまた現われん。」(イテル3:14-16)

この真理を再確認するべく、イエスは1833年、ジョセフ・スミスに次のように言われた。

「……太初にわれ御父と共に在りき。われはその『長子』(もちろん、霊の長子、の意味)なり。

汝らもまた太初に御父と共に在りき。『みたま』……なる御父と共に在りき。」(教義と聖約93:21, 23)

私たちは、前世の状態における霊についても、アブラハムに与えられた示現の記録からいくばくかの知識を得ている。この示現の中で、アブラハムは、天上の大会議に集う大勢の霊を示された。この大会議では地球の創造に関する問題が熟考されていた。そこは霊たちが降って行き、骨肉の体を得て人間になるはずの場所であった。この計画では、死すべき状態で試しの期間があったあと死ぬことになっていた。つまり永遠の霊の体と朽ちるはずの死すべき体とが分離するはずであった。その後、復活のときに、ふたつの体は再びひとつになって不死不滅の体になるのである。

アブラハムはまた、この地上での務めの間に忠実であることを証明したら、復活体となって、霊の父である天父の御許に帰ることを許され、また永遠の進歩が享受できることを知った。次の聖句はアブラハムの書の中にある言葉である。

「さて、主はわれアブラハムに、この世に先だちて組織されたる英智たちを見せたまいたりき。……」

神、これらの霊を善しと見たまい、……

言いたまはり、これらの者をわが統治者となさん。神、霊なりしこれらの者の中に立ちて……われに言いたまいけるは、アブラハムよ、汝はこれらの者の一人なり。汝は生れざる前に選ばれたり、と。

これらの者の中に、神の如き者(霊の長子であるイエス・キリストのこと)一人立ちて共に在りし者たちに言いはるは、われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これにより彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。

而して、最初の位を保つ者は更に付け加えられ(これは、私たちのことを指している。私たちは最初の位を保ったため、さらに付け加えられて、死すべき体を得たのである)、……第二の位(つまり、この世の生涯)を保つ者は、とこしえに栄光をその頭に付け加えられん。」(アブラハム3:22-26)

人の高遠な位に関する真理が、このように啓示されているのである。

一方、これと対照的に、人がその本質に関する神の啓示の御言葉を拒んだ結果として生じた墮落の状態を見事に描写した、アレクサンダー・ポープ*の詩を考えてみるとよい。ポープは、次のように描写している。

「いずれの地位にあるものか

谷間のうちにおかれたり

賢けれども陰にして

偉大なれども粗野なりき

あまたの知識に恵まれど

懷疑のために旗をあげ

あまたの弱き見い出せど

克己の誇り胸に満つ

赴くべきか居るべきか

悩みし問に答得ず

己は神かそれとも獣

いずれの道にも迷いたり

霊を選ぶかはたまた肉か

いずれの問にも答得ず

死ぬるをもって生を受け

誤りをもて正となす

無知なることはこの如く

その理知もまた然り
卑しむべきか誉むべきか

常に思案の的となる

思考と熱意が干々乱れ

あらゆることに乱れたり

悪を受けるやそれとも為すや

とどまることなきこの思案

高きを望みつ低きも望む

被造物の習いなり

万物の王たる主なれど

よろずのえじきともなれり

真理の判官^{はんがん}自負すれど

誤りもまた限りなし

栄光嘲笑共に受け

不可解なるはこの身なり

定められたる星のごと

ひとつとところにとどまり

生み、増え、地には満つとも

やがて朽ちるを定めとす……

世の広大な海原に

人生航路の帆あげて

あまたの望み抱きしが

情欲の風起りたり……

かくして胸に湧き出ずる

俗世の王たる情欲は

アロンの投ぜし蛇のごと

正しき望み飲みほせり」

(「人間論」第2巻・三条支部 吉田博訳)

人は神の子などではないという理論は、これまで、人の霊の成長を阻害し、道徳を低下させる主要な原因であったが、人々がこの理論を受け入れ、この理論に基づいて行動している限り、これは将来も変わることはないであろう。

そうなることは、はっきりと予想できたのである。このような理論の信奉者は、ポープが持った「己は神か、それとも獣」という疑問が起きれば、すぐに「獣」の方に味方することに決めているし、「霊を選ぶか、はたまた肉か」という疑問には「肉」の方に味方することに決めているのである。

人は獣であるという考えは、責任感から解放してくれるし、「われらは明日死ぬかも知れないから、飲んだり食ったりして楽

しめ」という宿命論的な態度を助長することにもなる。だが実際には、そのような人は、ポープの詩にあるような人間になってしまうのである。

「定められたる星のごと

ひとつとところにとどまれり

生み、増え、地には満つるとも

やがて朽ちるを定めとす……

世の広大な海原に

人生航路の帆あげて

あまたの望み抱きしが

情欲の風起こりたり……

かくして胸に湧き出ずる

俗世の王たる情欲は

アロンの投ぜし蛇のごと

正しき望み飲みほせり」

愛する兄弟姉妹たちよ、人は神の子であり、いわば胚の状態の神であるということが真理なのである。心の義しい人は皆、子供たちが次のように歌うのに、全く同意できるであろう。

「神の子です わたしやあなた

いろんなお恵み 感謝します……

みこころ行ない また天に住む

わたしを助けて 導いて

いつかみもとへ 行けるように」

(ナオミ・W・ランドール作詞)

人が神の子であるという知識は、私たちが持ちうる知識の中で、最も重要なものである。このような知識は、靈感を受けない者にとっては、何ら理解できるものではない。いかなる理論、科学、哲学、またいかなる分野のこの世の学問を動員しても、この知識を得ることはできなかつたし、今後もできないであろう。また、このような学問の方法を用いて、その研究が限界に来ている人々は、昔から常にそうであったように、「常に学んではいるが、いつになっても真理の知識に達することができない」(Ⅱテモテ3:7)のである。

このような知識を得ることのできる唯一の手段は、神からの啓示である。幸いなことに今まで引用してきたように、私たちに、アダムから今日に至るまで、繰り返し

啓示されてきた御言葉がある。

自分が神から生まれた息子、娘であるという知識を受け入れ、信じ、かつ聖霊の力によってその証を得た人の熱意や願望や行動の動機は、他のことを信じている人の熱意とは非常に異なっている。ちょうど、成長しているぶどうの木が、切り落とされた枝とは全く異なっているようなものである。

自分が神の子であると知っている人は、「己は神か、それとも獣」か、などと疑問に思うことはないし、「思考……が干々乱れ」ることも、「情欲」に駆り立てられることも、「あらゆることに乱れ」ることも決してない。また「定められたる星のごとひとつとところにとどまれり。生み、増え、地には満つるとも、やがて朽ちるを定めとす」ということもない。それどころか、聖典が教えているように、自分には天賦の能力が与えられており、子孫を生み出すことのできる他のあらゆるもの同様、成長の暁には、天の父母のような状態に到達でき、「とこしえに栄光をその頭に付け加えられ」(アブラハム3:26)と考えているのである。これこそ、人の目指すべき目標である。

また、十戒を受け入れ、山上の垂訓を受け入れ、知恵の言葉を受け入れ、律法として神から与えられたあらゆる指示と戒めを受け入れ、自分が生命をさげたはずの目標に到達するのに絶対必要なすべての戒めを受け入れるのである。

そして、救い主の次の呼びかけに心から応じようとする。

「すべて重荷を負うて苦労している者はわたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ11:28)

また救い主のチャレンジにも応ずる。

「……われまたは天にまします汝らの父が完全なるごとく、汝らもまた完全とならんことを。」(Ⅲニーフエイ12:48)

また、賢明で適切な答えが、主の次の戒めに耳を傾けることであることを知っている。

「……汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。そは、汝ら神の口より出ずるすべての言によりて生くべければなり。」(教義と聖約84:43, 44)

また、そのような人は、次の主の約束を絶対的に信じている。

「その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知るべし。」(教義と聖約93:1)

また、ヨブと共に次のように叫ぶ。

「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、末の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち、わたしは肉に在りて神を見るべし。」(欽定訳ヨブ19:25, 26)

また、アルマと同じ熱意を持つ。

「ああ私が天使になって私の心の願いを達することができたら善いものを。私の願いとは出て行って神のラッパのように地を震わせる声で話し、万民に悔改めをすすめることである。

まことに私は雷のような声で悔改めと贖いの計画とを万人に宣べ伝え、もはや全地の上に悲しみのないよう悔い改めて私たちの神に立ち帰れと万人にすすめようと願う。」(アルマ29:1, 2)

そして、最後に、ニーフエイと共に次のように決心するのである。

「私は、主が命じたもうことを行って行く。私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわれないことを承知しているからである。」(Ⅰニーフエイ3:7)

以上のことに、私の証をつけ加えたいと思う。私は自分が神の子であることを、また愛する聴衆であるあなた方も皆、神の息子、娘であることを知っている。さらに、この知識が私たちの生活で立派に実を結べば、私たちは、救い主であるイエス・キリストの贖いの犠牲によって、必ず天父の御許に帰ることができることを知っている。イエス・キリストの御名により、この証を申し上げる。アーメン。

*アレクサンダー・ポープ (1688—1744) イギリスの詩人

大管長 ハロルド・B・リー

「さて、
あなたはなぜ
伝道に出たい
のですか」



あるステーク部大会でのことだった。私は、幾人かの宣教師候補者と面接することになっていた。ひとりの青年の番になって、ステーク部長が私に言った。「次は非常につらい経験をした青年です。軍隊から帰ったばかりなんです。戦闘神経症にかかってしまったんです。伝道できる状態かどうか念入りに面接された方がいいと思います。」

それで私はその少年と会い、こう話しました。「さて、あなたはなぜ伝道に出たいのですか。あなたはそんな恐ろしい経験をしてきてもお、本当に伝道に出たいと思っているのですか。」

彼は考え込んでいましたが、少ししてから答えました。「リー長老、私は軍隊に入る前に一度も家から離れたことはありませんでした。軍のキャンプに着いてからというもの、起きている間聞こえてくるのは、ひわいな神を冒とくする言葉ばかりでした。私は、自

分で何か心の純潔さというようなものを失っていくように感じて、この恐ろしい悪に染まらないだけの力を与えてくれるよう神に祈り求めました。神は私の祈りを聞かれ、私に力を与えて下さいました。それから私たちは訓練に入りました。訓練は厳しく、私はそれをやり通すことができるよう、肉体的な力を神に祈り求めました。すると神は私の祈りを聞かれました。私たちは最前線に向かって進みました。大砲の炸烈音やライフルの音を耳にし、幾度となくざんごうの中に身をかがめました。指を出したらすぐにでも銃弾で吹き飛ばされてしまいそうでした。あまりにすさまじい戦いで、私はおびえてしまいました。その場に身を横たえ、ただ戦いがすむのを待っていたと思ったほどです。しかし私は、そこでの義務を為し遂げる勇気を与えてくれるように、神に祈りました。主は私の祈

りをお聞きになり、勇気を授けて下さいました。それから私は偵察隊にまわされました。敵を捜し出して、攻撃場所を味方に無線通信する役目です。通信が途絶えている間に敵に取り囲まれて逃げ場を失い、これでもう終りだと思ったことも何度かありました。私は私を守り導いて安全に帰させてくれる唯一つのよりどころに守護を求めました。神は私の祈りを聞かれました。リー兄弟、私はそのようにして無事に帰って来たのです。それで私は、祈ったときに力を下さった神、私たちの天父にお礼を言いたいのです。」彼はさらに続けて言った。「私の伝道に出る目的は、日曜学校やセミナー、神権会のクラス、そして家庭で学んだ信仰について人々に教えることです。困難な経験を通して私を導いてくれたあの力をほかの人にも持ってもらいたいのです。」

1973 MIAコンファレンス

＝信仰と親睦＝

内藤 亜沙子

伝道部YWPIA会長



待ちに待ったMIAコンファレンスがやってきました。8月2日(木)～8月5日(日)まで3泊4日の日程で、群馬県前橋市からバスで40分、赤城山連峰の中腹にある国立赤城青年の家に、108人の兄弟姉妹が参加して開かれました。今回出席した最年少者は13歳が3人、最年長者は60代と幅広く集いました。森林に囲まれ、小鳥のさえずりやせみの声、うぐいすの鳴き声が聞こえ、自然が私たちを迎えてくれました。

初日2日(木)は夜7時からグラウンドでファイヤーストームをたき兄弟姉妹が浴衣姿で、各ブロックの鳴り物入り、民謡、紹介などを織りまぜながら歓迎パーティー。互いに親睦を深め合いました。

3日(金)は「信仰と親睦」というテーマでセミナーやスポーツの祭典が行われ、リレーや混合騎馬戦などこの日1日でみんな真黒に日焼けしました。午後7時、激しい雷雨とともにドラマ祭が始まり西地方部はロードショー「じゅげむじゅげむ」を演じました。また東地方部の開拓者の様子を演じたドラマは、当時の開拓者の心を再び思い起こさせ、感激で胸が一杯になりました。

ドラマ祭が終る頃は雷も雨もすっかり上がっていました。

4日(土)、前日より続くセミナーでは、教える者、参加する者と



もに強い証を得ることができました。ここにセミナーの教師の証を少しご紹介しましょう。「若い兄弟姉妹たちの生き生きとした証を聞くのは本当に素晴らしい機会であり、特権でした。MIA大会に参加した兄弟姉妹達の目の輝きを見たとき、会員ひとりひとりの主体的に参加することが、いかに大切かということを知りました。参加したひとりひとりが『自分がこの大会を運営しているんだ』という充実感があったのです。来年のMIA大会にはもっと多くの兄弟姉妹が参加出来るよう、充分チャレンジするつもりでいます。私だけ『祝福を受けた』と言って喜



んでいても仕方ありませんからね。私よりも、若い人々にもっともっと成長してもらわなければ…。

夏のプログラムに一段落をつけた今また新たに、一生懸命主の御業に励みたいと思っております。体がいくつあっても足りない毎日です。セミナーの生徒たちにも手紙を書かなければなりませんし…。セミナーの責任を与えて下さり、本当にありがとうございました、微力ですが何とかやらせていただき、心から感謝しています。セミナーの生徒たちを愛することを覚えました。祝福です。」

5日(日)は午前7時から群馬支部にて断食聖餐証会が行われ、約60名の兄弟姉妹が証をしました。そのひとりびとりが、本当に強い気持ちを持ち、自分たちの与えられた責任を果すことがどれだけ大切かを学びとる事が出来、この4日間のフィナーレを飾りました。

家族の一致

石井 猛

福岡支部

日本で一番酒癖の悪かった私がここに証の出来ることを感謝致します。バプテスマを受けて早くも9年になりますが、教会を知るまで毎日酒を飲んでその度ごとに妻を泣かせ子を顧みず、家庭の平和はよそ事のようにでした。そ

の私が主の愛と兄弟姉妹の愛によって進歩することが出来たことを感謝致します。聖書の中に「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけがはいるのである。」(マタイ7:21)という聖句があります。

私は渡辺伝道部長さんが西部伝道部に赴任されて来たときに病院に入院しておりました。第1回の日曜日に病院に来て下さり、私の体に灌油の儀式を施して下さいました。それから半年入院してから退院してこんなに元気な体になりました。そのとき私は本当に泣いて喜びました。しかしのどもと過ぎれば熱さを忘るで、私そのときの感激を忘れて去年の今頃教会より少し遠ざかっていました、といえますのは、聖餐式が済んだらどんなふうにして帰ろうか。支部長さんに見つからないように帰る方法をいつも考えていました。今なら玄関にいらっしゃらないからと思いついて帰ろうとしていると支部長さんがどこからか現われるのです。そんなとき支部長さんが憎かったのです。支部長さんはそんな私をいつも心配して下さいました。私たちの喜びは支部長さんの喜びであり、天父の喜びです。又私たちの悲しみは支部長さんの悲しみであり、天父の悲しみです。

その頃、支部長さんは私に色々な責任を与えて下さいましたが、いつも断っていました。それにもかかわらず日曜学校の副会長の責任を私に与えて下さいました。私は一生懸命にその責任に向かって邁進致しました。会員となってこれだけ一生懸命にやった仕事はありませんでした。3月のある日曜日のことです。私は聖餐会の話の責任を与えられていました。今日は聖餐式で皆さんのお役に立つような話をしようとして張り切って出席しました。その日日曜学校の臨時教師の責任をいただきました。こんなに嬉しいことはありませんでした。そして天にでも昇ったような気持ちで「感謝を神に捧げん」の讚美歌を歌いながら帰りました。

聖霊の導きによって神様の仕事をすると祝福があつて証を得る…証を得るとまた神様のことをしたくなります。このようにして証は雪だるま式に増えて私たちは進歩し、救われます。そのとき始めて聖霊の導きと言うものがこんなに素晴らしいものかと分かりました。私は今まで9年間も眠っていました。右の道か左の道かというときに、真中の道を通っていました。左は通りたくなかったのです。左を通るとまた家庭の平和が乱れます。左も右も通りたくなかったのです。けれども私を取り巻く神様のプログラムが私を導いてくれました。それは去年のファミリーキャンプです。日曜学校の責任です。セミナーです。ハワイ神殿訪問計画です。

私がバプテスマを受けた頃、妻がいつも什分の一を出すときになると、あなたが放蕩しなかったら什分の一もなくて良かったと、愚痴をこぼしていました。けれども先日私の家に支部長さんが来られたとき、妻は、私が放蕩をしたお蔭でこの教会を知り、家庭が平和になり、家族4人揃ってハワイ神殿に行くことが出来ることを感謝しています、と支部長さんに申し上げました。このように私達家族は家庭の夕べ福音の勉強、教会の責任を通して証を育くもうと努めています。また家庭が一致して、このまっすぐで狭い神様の道を福音という鉄の棒をしっかりと握りしめ、永遠の生命を受けるまで耐え忍びたいと思います。この証のすべてをイエス・キリストの御名によって証しました。



私の証

遠藤 肇

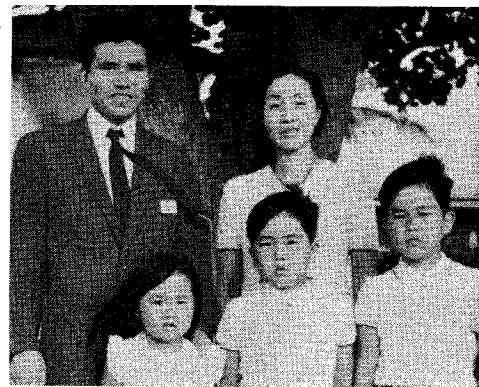
仙台支部

マッケイ大管長は「家庭を天国の一部にすることは可能である。天国は理想的な家庭の延長である」と言われ、主の多くの予言者から私たちは「自らの家庭を地上の天国にするよう」教えられてきました。家庭は個人の進歩と家族の救いのために欠かすことのできない場であり、「主の家」の縮小された形であると私は考えます。主の家が祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、律法の家、そして秩序の家であるように、家庭も同様であって、家庭にあって個人個人が祈り、また家族とともに祈り、互いに教え励まし合い、主の律法のもとに義しい生活と、神権者のもとに統一のとれた生活をするのが大切だと思っています。主が「われ今汝に一つの誠命を与う。すなわち汝もし救われんと欲せば自身の家を整うべし。汝の家には正しからざること多ければなり、その家族の者共をして家に在りて必ず今一層勤勉に事にかかわらしめ、また常に祈りをなさしむべし」（教義と聖約93：43, 50）と啓示されたことから、私は神権者は常に自分自身の祈りを必要なときにどこでも行なうのはもちろんのこと、家族に祝福があるよう主に導きを求め、また家族が聖典、教義を勉強し、祈り求めるよう正しい勧告をする責任が課せられていることを知りました。

福音を教える場として、家庭ほどふさわしいところはないと思います。朝の食事の前に、子供たちに福音を教えるとき、また家庭の夕べで家族がそろって福音を学ぶとき、福音は個人より

むしろ家族にとってより大切なものであると感じます。昨年末、上の子が8歳になってバプテスマを受けたとき、「末日聖徒イエス・キリスト教会は神様に導かれている神様の本当の教会です。僕は教会の会員になれてうれしいです。いつも正義を選んで、神様のところへ帰れるようがんばりたいと思います。いつも神様の助けがあるようにお祈りします」と証しましたが、これは私たち家族の証でもあります。これからあとふたりの子供のバプテスマと共に、家族の証が強まることを私は望んでいます。子供たちに福音を教えるには、まず忍耐と愛情が不可欠であることを知りました。さらに祈りを教えるなら親が敬虔な祈りを主に捧げること、福音の勉強の大切さを教えるなら親が聖典を勉強すること、信仰を教えるなら子供に信頼の情を示すこと、すなわち言葉と模範により行動する以外にありません。そして、それを継続することです。小さなことから大きなことが生ずるとは、真実であり、マッケイ大管長の言われるように「この瞬間、小さなことに福音の原則を適用すること」が、福音の実践であります。私は親として、また神権者としてのあるべき姿を、毎日のように家族から学んでいます。子供たちが私の後をついてくれば、主のところに導かれるとい切れるような生活がなかなかできないのは恥ずかしいのですが、少なくとも私はそのように生活したいと願って努めています。いま子供たちに歴代大管長の生涯を少しずつ教えていますが大管長たちの示した勇氣、主をおそれる心、愛情、決断はそのまま私に対する教えであります。

こんどのハワイ神殿訪問で、私たち家族がシーリングの儀式を受けることを子供たちに話したとき、子供たちは「これでみんなそろって神様のところへ帰れる準備ができるね」と手をたた



いて喜びました。私には家族のだけれどが必要です。不必要な人はだれもいません。私たち夫婦と子供たちが一つに結ばれ、家族の輪をつくるとき、だれかが欠けたらそこに天国は存在しません。

私は福音は確かに、私たち家族にとって大きな喜びの源であるとはっきり知りました。この喜びは主から来るものであり、決して消え失せることのない大きな宝です。家族とともに主に心を向け、主に祈り、ともに学ぶとき、家庭の中に一致と愛が生まれ、主のみたまの宿ることを証します。さらにこのみたまは、私の家庭を天国にするための、大いなる愛の導き手であることを証します。イエス・キリストの御名により申し述べました。アーメン。

永遠なる結び

佐藤 公作

始主子

東京第3ワード部

初めての神殿訪問の第一歩を私たちは緊張と期待の中で踏み始めました。紺碧の空と海、緑の木々や芝生、赤や黄や白の花、少しユーモアのあるヤシの木、それらの美しい自然と素朴な風土に私たちはまず驚異の目を見張りま

した。しかし何よりも印象的だったのはそれらの自然の中に調和してそびえる白い神殿の美しさでした。神殿の中で与えられたあふれんばかりの祝福と安らぎを私たちのささやかな証と共にお伝えできますことを、感謝しております。1973年8月20日、その日は私たちにとって永遠に忘れえぬ記念すべき日となりました。

…去年の私は友達からのプレゼントと両親のささやかな御馳走に囲まれていました。ハワイ神殿の中で誕生日を迎えた今年のその日、私はかつていただいたことのない素晴らしいプレゼントに囲まれたのです。永遠の両親は私自身のエンダウメントと愛する兄弟との永遠の結び固めの儀式、兄弟は暖かい愛に加えて断食とお祈りを、それに福音の友は心のこもった堅い握手と愛ある言葉を贈って下さいました。私は何よりの素晴らしいプレゼントの祝福にただ感激と感謝の涙で一杯でした。

…初めての神殿訪問の第1日目でしたので必要な導きと主の大いなる祝福を漏らさず受けられるよう断食をし、お祈りをしました。休息を十分に取ったので旅の疲れはありませんでした。断食と祈りが霊的な心と謙遜な信仰を育み、主にとても近くあったように感じました。その日はちょうど姉妹の誕生日でしたので永遠の愛と共に断食と祈りをプレゼントしてあげました。

シーリングの部屋はとても美しいものでした。あたかも主の御前にいるような、主の栄光がそこにあるような気がしました。あのときの喜びと感激をどのようにお伝えしたらよいものか。永遠に結ばれるべく静かにひざまずき堅く手を握り合ったとき、私たちはとてもどもなく流れる涙をどうすることもできませんでした。福音を通して永遠に結ばれた喜びと主への感謝の涙がお

互いの頬を伝わりました。強い結婚の反対に暗く沈んでいた私たちを主は選り信仰に富ませ、永遠の絆へと導いて下さったのですから。

…私たちの交際が知られ、謹慎中の姉妹を訪れたのは1月の冷たい雨の降る夕方でした。交際の自由を求めに行ったのですが……「バカヤロウ／死ぬまで結婚なんかさせないぞ。結婚したいなら俺が死んでからやってくれ。……」返ってきたのは厳しい叱責と罵倒の言葉でした。冷たい雨に打たれ泣きながら帰りました。それ以来、会うことはもちろん、電話をかけることも、便りを出すこともできませんでした。今にも消えそうな私たちの信仰と証をようやく保ちながら、同じ時刻に祈り、同じ日に断食し、励まし合いました。更に多くの兄弟姉妹が助け、励まし導いて下さいました。ある兄弟と姉妹は同じ時刻に祈って下さり、ある姉妹は便りを届けて下さいました。

…冷たい雨に打たれながら悲しく暗闇に消える兄弟を涙で送りました。毎晩のように泣きました。淋しく、悲しく、讃美歌を歌いながら眠ってしまった夜もありました。懸命に信じようと心に言い聞かせながらやっとの思いで祈り続けました。「耐えよ、倅わせの日の為に」という聖徒



の道にあった短かい言葉を大切にその日を待ちました。6カ月間というものとは全く教会に出席できませんでした。バプテスマを受けて2年半で得た小さな証を守ることが精一杯でした。ある時には主の愛を捨て父に従おうと思った日もありました。いつも励まして下さり、多くの兄弟姉妹がこの私の小さな証に愛と勇気を注ぎ込んで下さいましたのでこの苦しみ、悲しみから脱することができました。

激しく反対していたあの父が神殿訪問にと10万円のお金を送って下さいました。一時は憎んだ父を私たちは心から素直に愛しています。深い父の愛を知り、主の愛を知りました。耐えられないような試しはなく、信仰がためされ、次に祝福が与えられ、さらに堅い信仰と証が生まれることをはっきり知りました。多くのことを学んだ私たちは主に助けられ導かれ、永遠の伴侶となるべく神殿に入ることができたのです。私たちの涙はこの十分すぎる主の報いに対する喜びと感謝でした。神殿での日々は私たちにはっきりと神は生きておられ、イエスが救い主であることを感じさせる日々でした。数々の儀式を通して愛する人と永遠に結び固められることがいかに大切であることを知りました。愛する先祖の救いは私たちの責任であり、私たちの手中にあります。これからはこの祝福を受け福音に従った喜びを見いだせるよう励みたいと思います。神殿はまさしく主の宮居であり、神が実に生きてましまし、イエスとその御子であり、私たちの救い主であることを証します。アーメン。

公 告

大管長会との協議の結果、東京都港区北青山3丁目34番1及び34番4所在の不動産を売却することに決定し、現在最高価競売人と交渉中です。

昭和48年10月1日

宗教法人

「末日聖徒イエス・キリスト教会」

